江戸名所図會

三

丘氏之記

緣山増上寺　廣度院と號し關東淨家の總本寺十八檀林を冠首として盛大の佛域なり百一代　後小松院の御願にして

開山は大蓮社酉誉上人中興なり普光觀智國師なり

十八檀林は武總常野等なる御當家　御祈願所平氏の松平氏の子孫を以て最勝とする不因を能雪霜を侵し細を徒し細を知るべきは十八檀林なり依て是を弥陀の十八願の中に十八ゆひ精舍十八區を建て永く檀林と號け子孫永く安盛慮を徒ひ淨家の時代を淨家の白旗流義なり霜雪の後松樹の繁茂多く英才を育し法運興窮の樣を表するなり

本堂本尊阿彌陀如來　惠心僧都の作中に座像長四尺

額　三緣山　鄽山上人真蹟　上人は當寺第十三世なり甲州の産なり高坂彈正の子なり

御經藏　本堂の前左の方　舞の中にあり或人云ふ納る所の一代藏經なり

後彦坂九兵衛尉　宋板なり其牧豆州修善寺にあり平政子の寄附なり

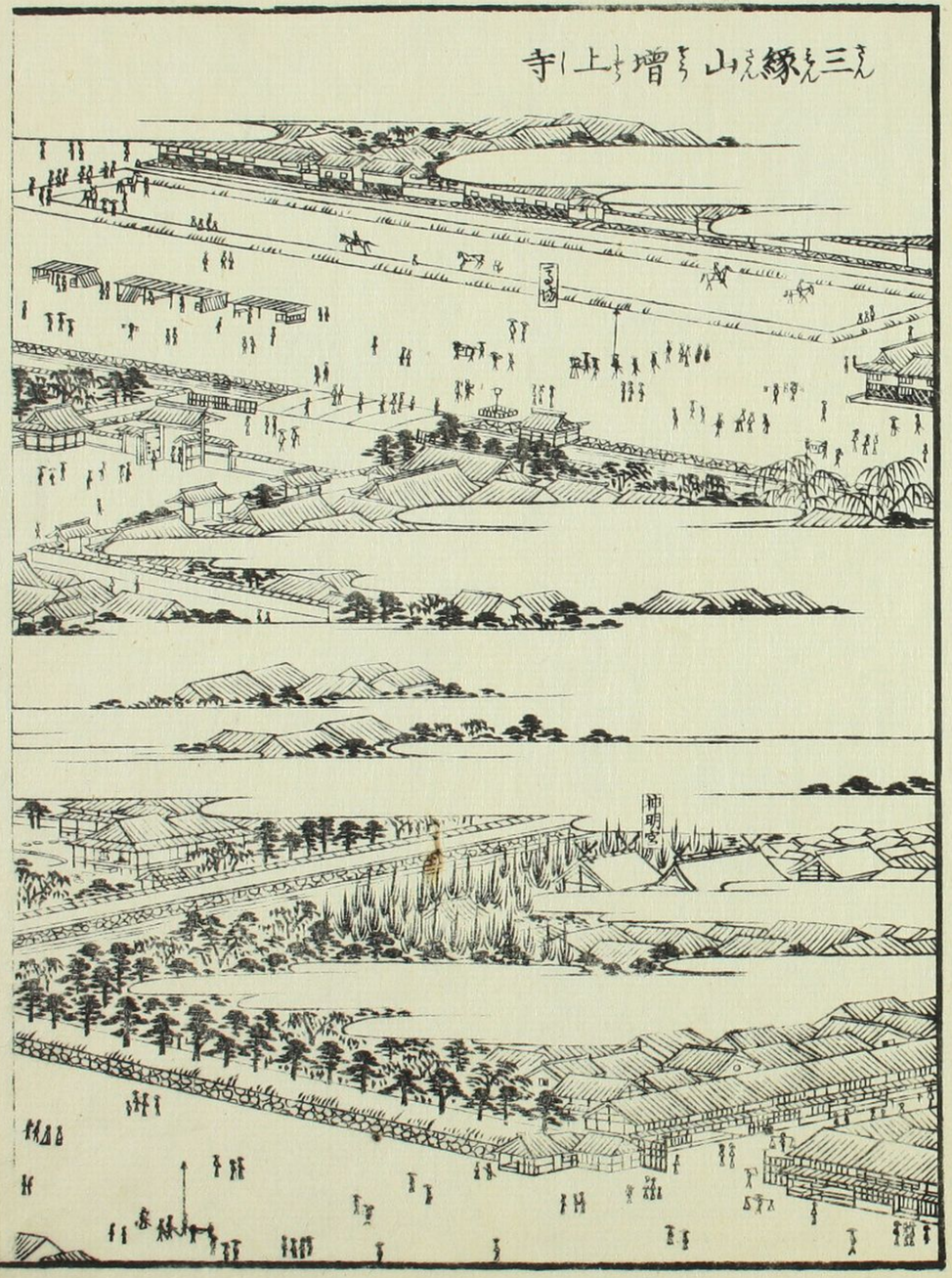
台余を奉し當山にうつしとなり菊岡沾涼云昔は方丈ふ

寛永九年　照誉上人了学大和尚　經藏を創立しるとなり今も

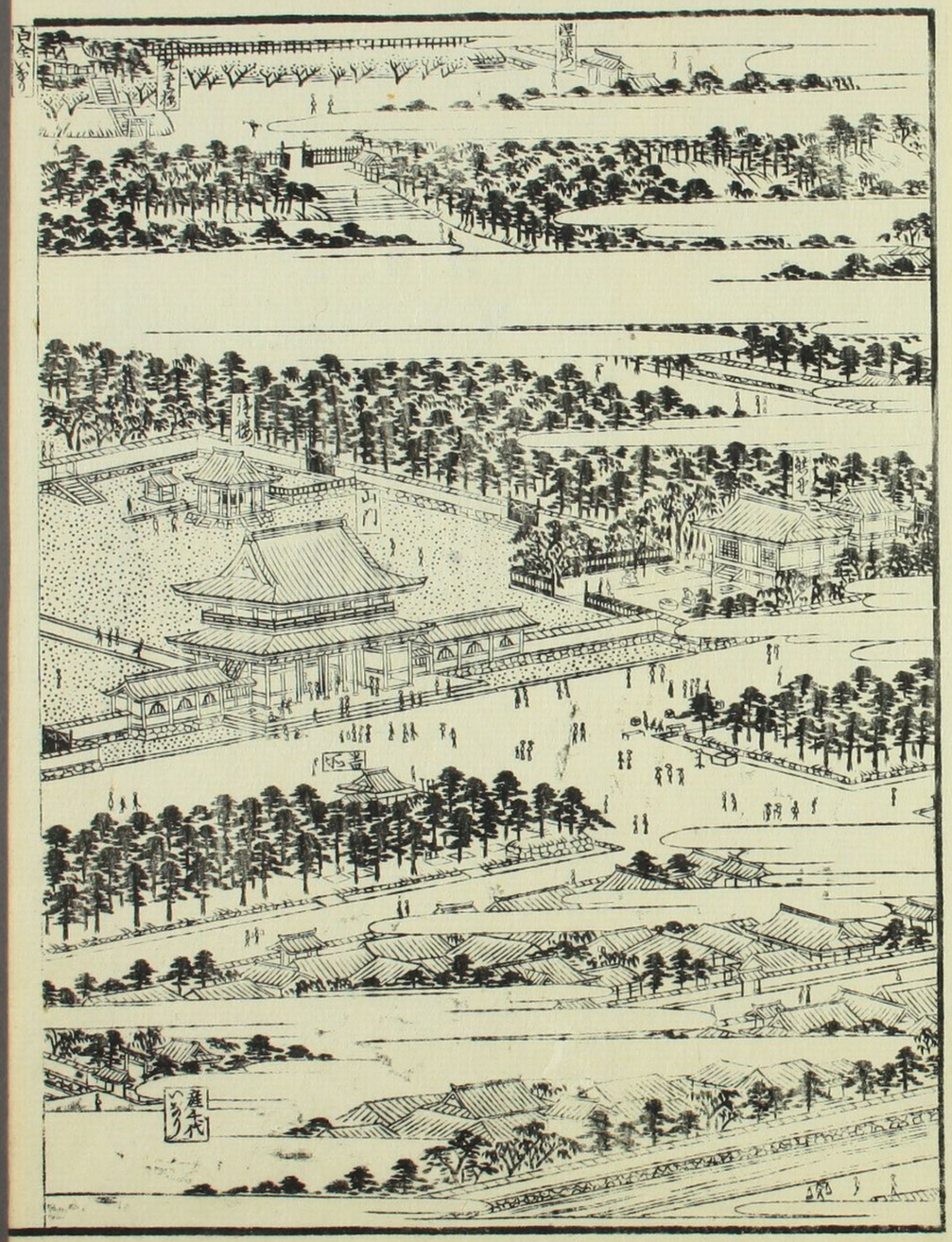
宮造に列せ

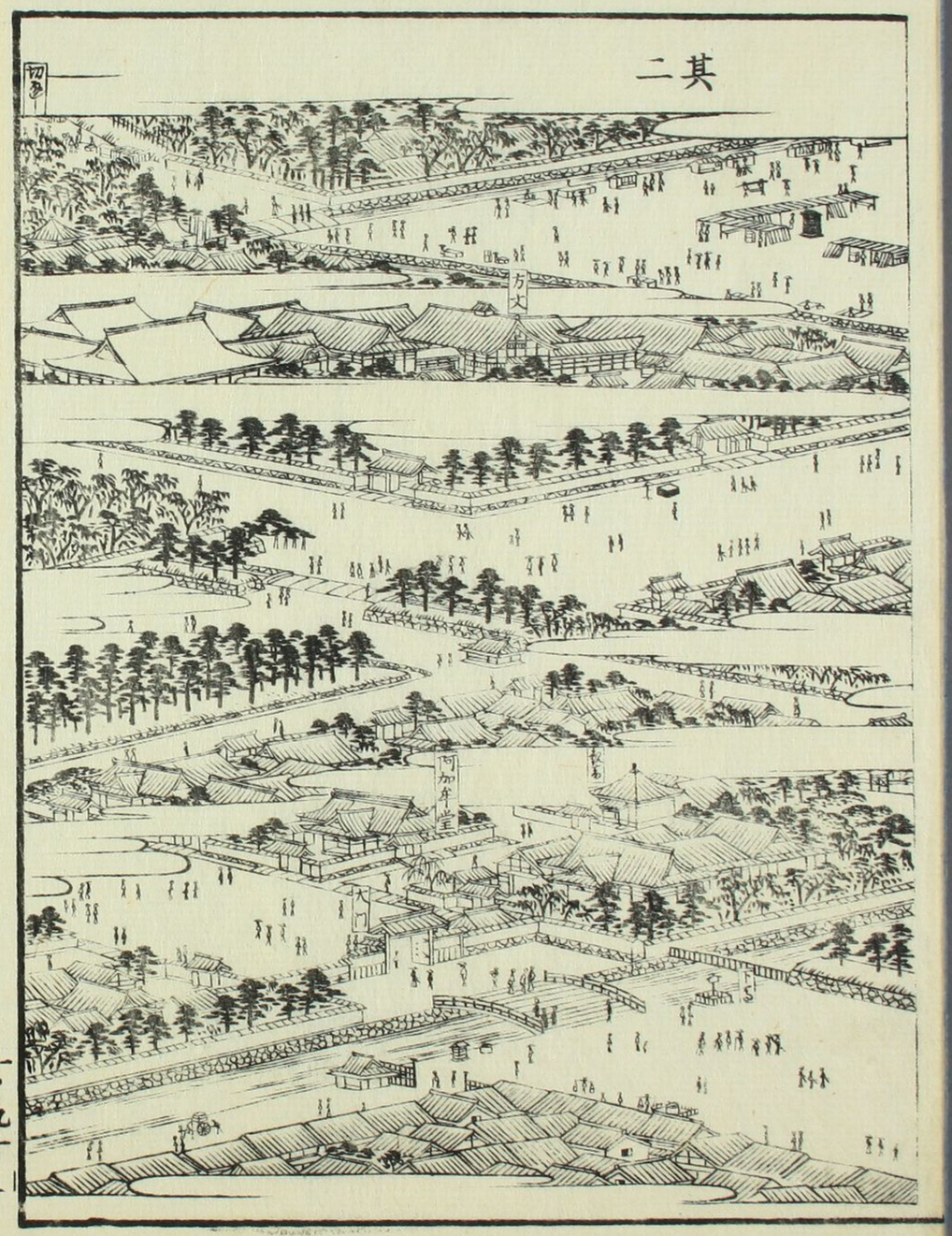
開山堂　同所左にあり當寺開山以下累世大僧正の

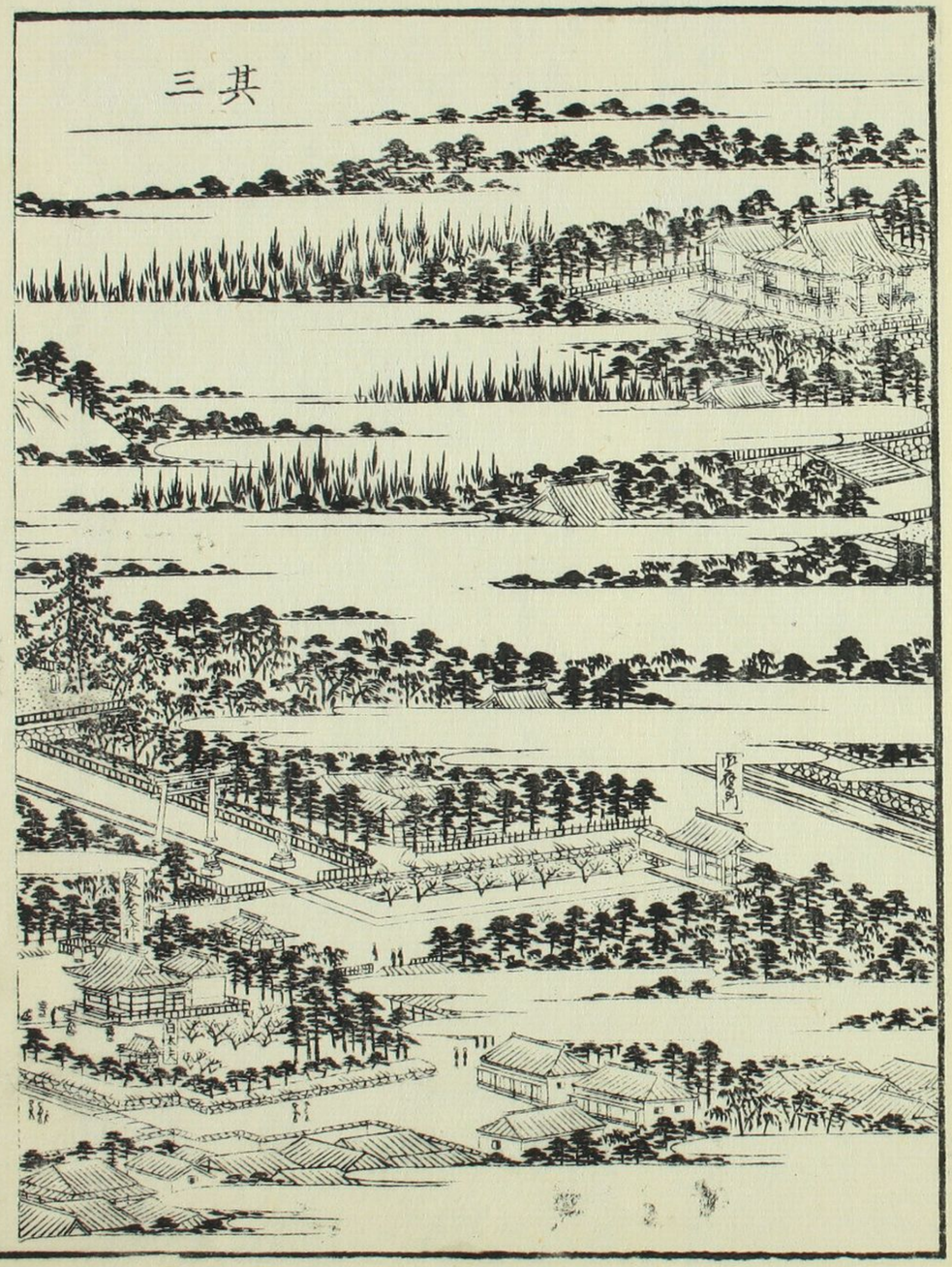
遺像靈牌等を置き

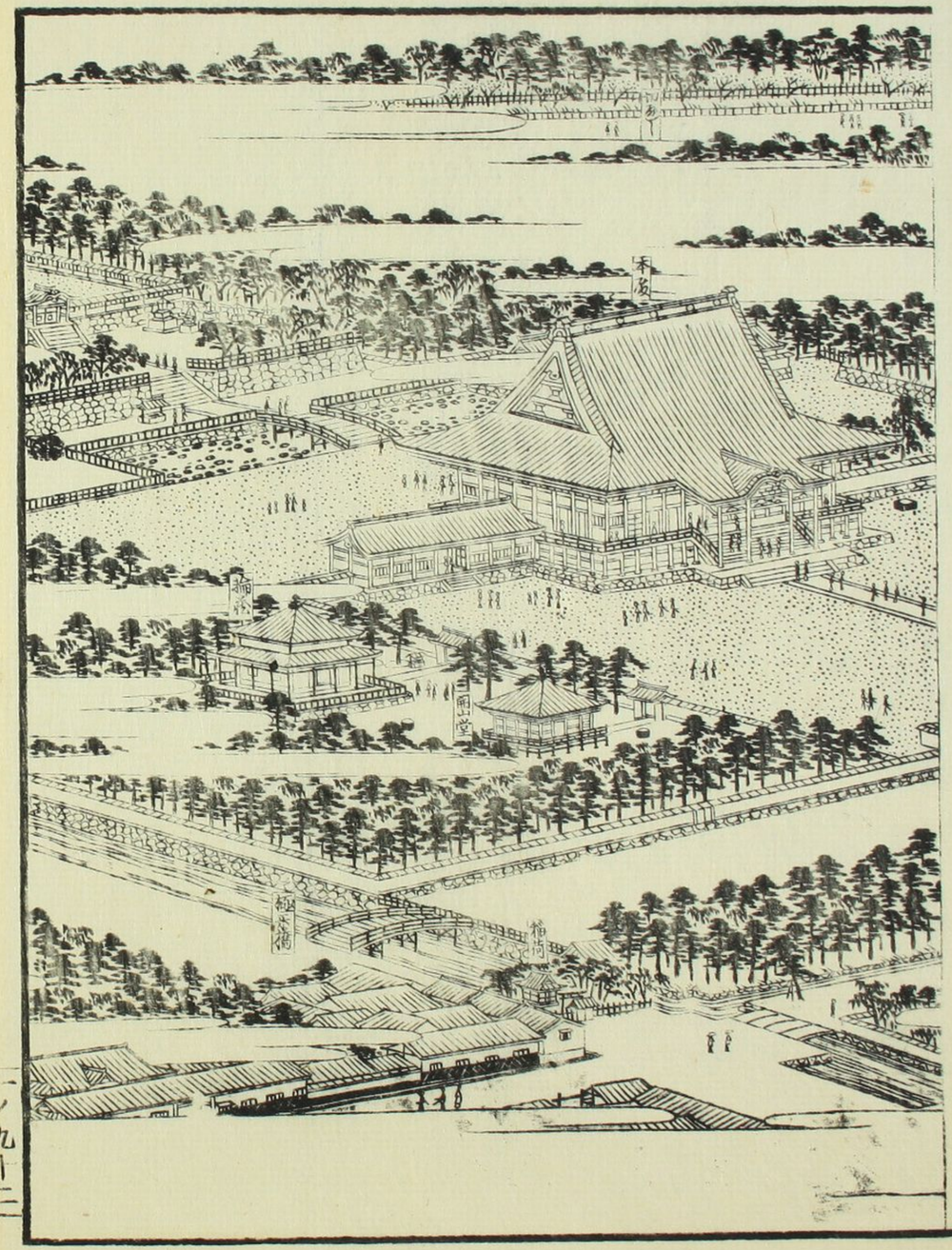


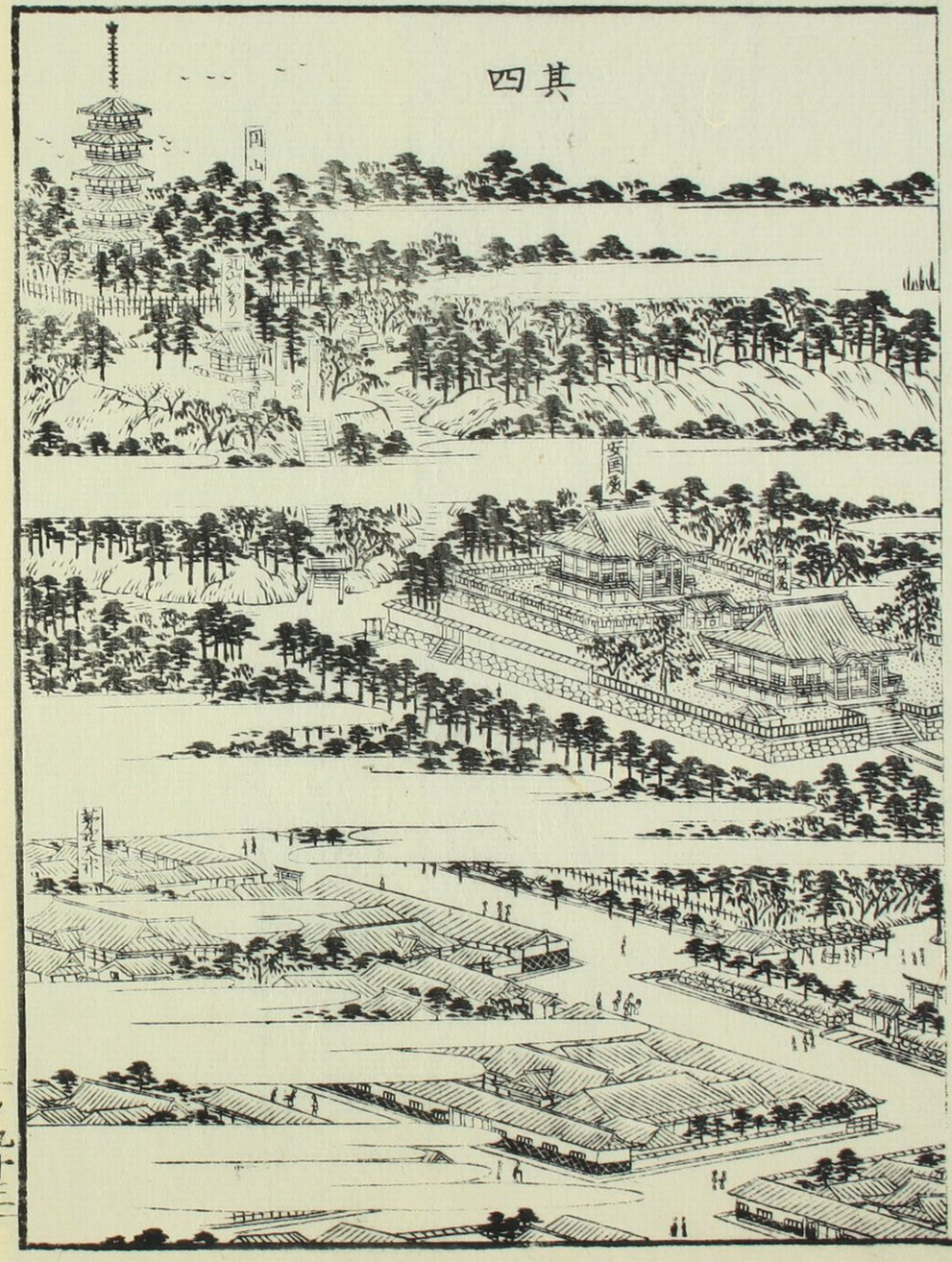
開山酉誉上人諱ハ聖聰大蓮社と号ス（鎮西正統第八世の祖とす）貞治五年七月十日（千葉系圖貞治二年六月三日とあり）北總の千葉陸奥守氏胤女ハ新田氏なる童名を徳壽丸と云（一書に徳千代とあり）加冠して胤明と称す出離の志深く釋典を慕ひ九歳ゆゑ遂に同國千葉寺に入て落飾し初て密教を学ひ後岡公に投帰して浄宗に入智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺に住せる（今の増上寺是なり江戸名勝志に云増上寺の旧地ハ桔梗町一丁目越後屋敷辺なりとあり）此寺始ハ真言瑜伽の道場なりしを竟に光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗風を轉して浄業の精舎とす永享十二年庚申七月十八日寂し歳七十五臘六十七（東國高僧傳に應永二十四年とあり）中興開山勅賜普光観智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源誉上人と号す（平山左衛門尉季重の後裔なり傳燈系図に云姓ハ由木又ハ金吾投尉源利重云々）武州由木に生る始衣を片山の宝臺寺に掘ひ十八歳感誉




其二
方丈
同加年堂


其三





上人より帰りて登壇受戒せ天資聰悟ゆゑ顕密の教を究む上人没後上総に到る長傳寺を創し大に法席を開く人呼て教海の義龍蓮苑に祥鳳とらん天正十三年雲誉上人の會下にあり同十七年八月墨書を傳兼しん增上寺弟十二世となる（當寺弟十二世）同十八年天下安靖なるに逮んで大に大神君の眷顧をゆ屢営中に請せ法要を聽受しゆひ崇信他に異なり竟に增上寺を修営せ植福の地とゆへり又後陽成帝師を宮内に徴しく道を問ふ盛に淨教に深旨を陳せ叡感あるく褒章を加へ新に宸翰を染めひ特に普光觀智國師の號を賜ふ時に慶長十五年七月十九日なり元和六年師微恙をかを嗣君

増上寺山内
芙蓉洲
船の天社
池中の蓮

大将軍親ら臨ひて忝くも疾を問せ給ふ十一月二日諸徒に遺誡し辭世の偈を書しく曰く佛話提撕心頭塵未後一句但稱佛と筆を拋く端座合掌し佛号を唱へつゝ化を世壽七十有七僧臘六十 獲國篇世壽八十とあり 門葉蜂起し徒流に浴を撰述する和論義決擇集阿弥陀経直譚等大に世に行はる 以上浄土高僧傳浄宗獲國篇

大銅鐘 本堂の右の方にあり 銘曰新鑄洪鐘 掛三縁山増上寺之樓 二十六世傳燈系図等に出つ 鐘の厚さ一尺余口の渡り五尺八寸 その高さ一丈程あり 銘曰新鑄洪鐘 掛三縁山増上寺之樓 二十六世森誉上人歴天大和尚延宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源祇惠鑄工椎名伊豫吉寛云〻其聲洪大にして遠く百里に聞あり一撞の間の響き尤長くして遠く一里鐘と称せり 又後ひく當國熊谷の辺より聞ゆ 隅つ又安房上総へも聞ゆるのへり

熊野三所權現祠 同所にあり則當寺の鎮守

黒本尊堂 本堂の後蓮池の東の方にあり 僧都の作なり 長二尺六寸 相向圓備みな〻生身の佛體に向ふが如し世人呼んで黒本尊と称せり 多くの星霜を歴て金泥変して黒色となる故に此称あり 或ハ源九郎義経持ち給ふる不

故に九郎判官といふの意なりとも始参州桑子の明眼寺にありしを某の邑の調を以て寺産に充ん此霊像を始め寺に迎へ新に宝帳五扉構節精巧を極む 以上浄宗獲國篇に載る 元禄八年増上寺住職の時挂昌一位尼公重く佛龕を十六日四月八日同十七日諸人参詣せり

三門 元和九年癸亥御建立 或云八年 十六阿羅漢等の木像を置 四月七月の十六日二月八月の彼岸の中日又二月十五日四月八日に登樓を許さる 樓上に釋迦文殊普賢

安國殿 本堂構の外南の方にあり四月十七日八所祭礼に参拝を許さる 詣る人多し来由ハ其憚あるを以て是を略す 別當を安立院と号す

五層塔 同所御佛殿の地蒼林の中にあり 涅槃石 同所にあり御彫物師吉岡豊前作なりと 曼荼羅石 同所にあり後藤祐乗得乗の作なりと 羅漢石 作なりと来迎石とも名づく 鷲門 同所にあり

極楽橋 同所前の溝に架せる

宗廟 御當家 御代の御霊屋なり

常念佛堂 當寺院中にあり 別當を惠照律院と号す 浄土律宗にして當山の別院なり 涅槃門の方にあり 横蓮社縱誉心岩上人開基 丁同巷赤羽心光院の条下に詳なり 當院に上人真筆の涅槃像の印板あり 有信の輩に授与せり 他の図に異なり

性壽庵 方丈の後の方にあり 尾州清須城主松平薩摩守忠吉の霊牌を置く故に俗に薩摩堂とよぶ 側に小笠原監物を始め〻〻殉死

五人の石塔あり 柳の井といつて同所南の坂通りよりある名泉なり 昔飯倉の神明も此地よりあり

飯倉天満宮 天神谷よりあり 當山の地主神なり 社地よ梅樹を多く栽く 二月の頃一時の莊觀なり

宝松院 別當也 茅野天満宮 同所南の方松林院よりあり 神像ハ菅神の直作なり

舊跡 山下谷明定院よりあり 是も當山の別院なり 明定院前大僧正定月 大和尚明和七年より建立せる六間四面の堂ふしく戒檀造なり

圓光東漸大師 赤羽門の内蓮池の中島よりあり 右ハ智證大師の作なり

圓座松 同所より 圓山 同所より 辨財天祠 赤羽ハ智證大師の作なり 星霜を経て後觀智國師感得あり 當寺宝庫より納めあり 貞享二年生誉靈玄上人此所より一宇を建て一山の守とあつめ宝珠院別當なり 中島と芙蓉洲と号く 此所門より外ハ赤羽 品川への往道なり

子聖権現社 清林院別當 産千代稲荷 観智院よりあり 昔ハ普光院と号もとより當寺ハ合蓮社明誉檀通上人の旧跡なりといへり 阿加牟堂 東の大門の通り常照院よりあり 念佛の道場なり

大門 東より向ふ當山の總門なり 外ハ下馬札を建らる 御成門 北の方馬場より相對す 此所ゆゑ下馬札あり

涅槃門 切通の上よりあり 惠照院より 柵門 山下谷より赤羽へ出る所 涅槃像あり 赤羽門 ともいへり

當寺旧古を見塚の地よりあり 光明寺と號ず 真言瑜伽の密場なり

後小松院の御願より依て草創あり

古刹なりしかも至德二年酉誉上人移り住もるの後竟より誉上人 傳通院三ケ月の德化より歸し寺を改めて三縁山増上寺と號し宗風を轉じて浄刹となる 事跡合考より出せる三縁山歴代系譜より云く當寺草創之地者貝塚今糀町邊中頃移于日比谷邊後慶長初移于芝云云 日比谷より芝へ移りしハ慶長三年戊戌八月なり 武德編年集成より慶長三年戊戌去る天正十八年辛卯平川口へ移され増上寺を芝の地へうつしとあり 平川日比谷古へ地を接せる混淆せり

東照大神君 天正十八年始て江戸の大城へ入らせ給ふ 州民鼓腹し老幼相携て道路より拜迎し奉る 幸より寺門の前路通御あるあり 観智國師も是を拜せんとして出て寺前より是則比丘谷の時より師の道貌雄毅尋常なるを見そなはし給ひ其名を問せ給ふ 乃寺より入て懇ろに其後當寺を以て植福の地となし給ひ永く師檀の御契約あり 御崇敬あつく屢師を當中より清せ給ひ法要を聽受なり給ひ待遇礼を殊にし是を親王より比せ給ひ師を召て來與し給ひ殿階より昇るを得せしめ以て永式とす 今より至て歴代の住持成この栄をうく 時より寺境隘狹ゆゑ

大城ニ接近セ是乃比ヽ谷ニ依ク今の地ニ移サレ大ニ資財を喜捨し殿堂房室ニ至るまで悉く営建しまひ最宏壮の大梵刹となる事跡合考ニ慶長十年乙巳本堂回廊ハ古造営にして大伽藍と云ヽ

於是浄家の宗教一時に興し念佛の聲天下ニ洋々たり

以上浄宗護國篇出ス慶長十年一朝門前の老翁師ニ謂て云ク今夜祥夢を感ず師微笑して其夢を驚け吾買んと云ク青銅二十疋を與ふ既ニして翁云ク増上寺軒端の樹木繁茂し師曰ク吉徴なり慎て人ニ語ること勿れと果して翌日伽藍営復の命あり竟ニ宏構鉅材天下壮観となる由浄土高僧傳ニ出ス

抑當山ハ関東浄刹の冠首ゆゑ龍象の聚る和實ニ霊山會上布金紺園ニ比ス人數百戸の学寮ハ畳々たる軒端を輾て支院ハ三十餘宇靡々たる覺を連ねて三千餘の大衆ハ常にあつふ集る中ニも能化ハ一代の法蔵を胸間ニ貯へ所化ハ十二の教文を眼裡ニ晒せて三心即一の窓の前ニ五念四修の月を弄ひ事理俱頓の林下中ニ実報受用の花を詠す佛閣の荘麗なる七宝荘厳の浄土も又此を去る事遠ク遠ク ス ト ヲ 思ハ ル ル

御忌參 正月廿五日 涅槃會 二月十五日 誕生會 四月八日 開山忌 同十八日 小修 一山悉出仕 近在の末寺より出て大法會を修ス

十夜法會 十月六日より同十五日迄修行ス

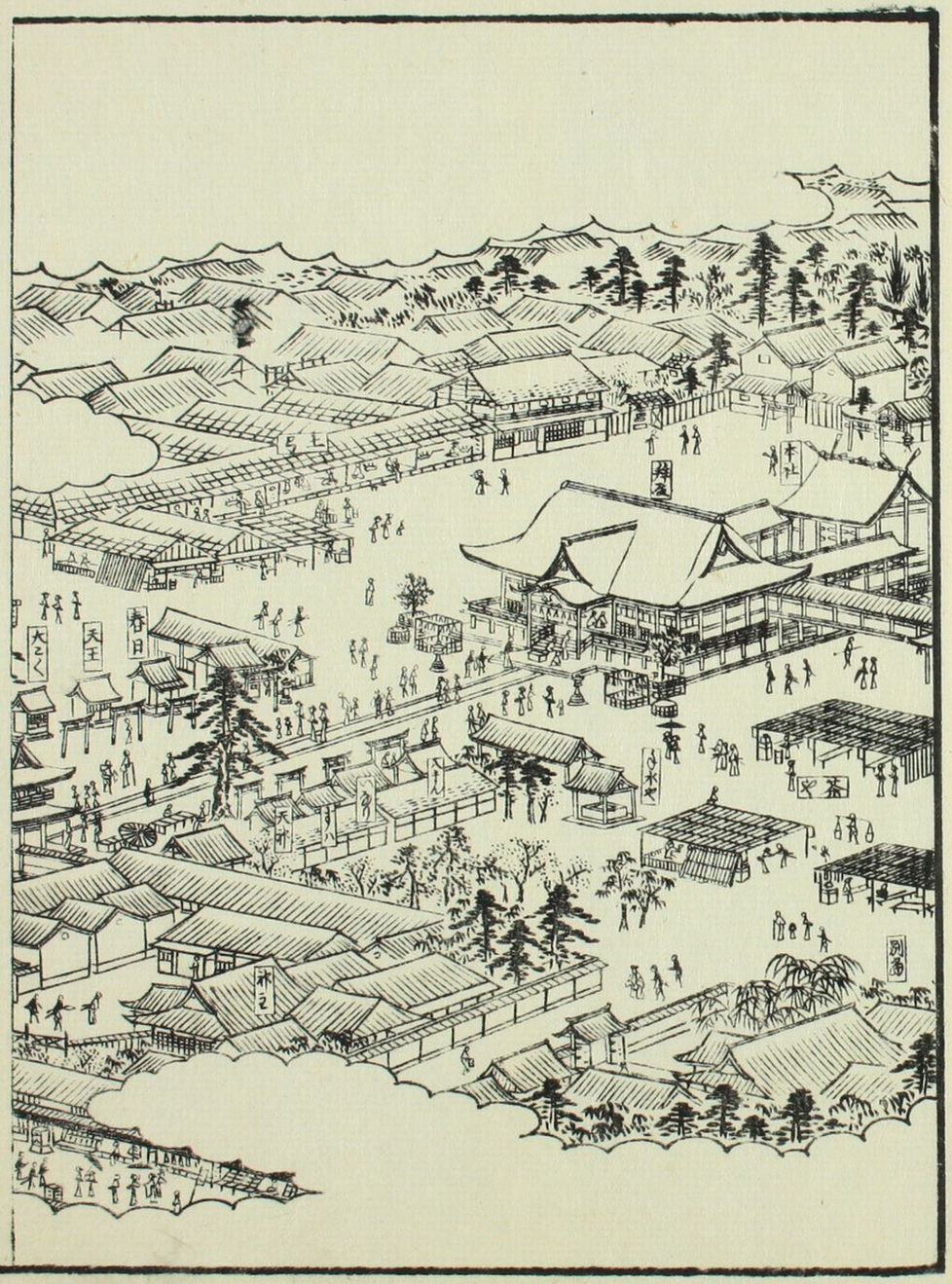
飯倉神明宮 同東の方神明町ニあり 江戸名所記等ニ日比谷神明と称ス 今俗間芝神明

其舊地ハ増上寺境内飯倉天神の社地なりと 或云赤羽の南小山神明宮の地なりとも 社司ハ西東氏 名所記ニ往古當社の神官あり 相州足柄郡より齊藤氏なる人を招き神主とすと云 別當ハ金剛院と号ス 其餘社家巫女ホあり

神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨 當時四貫文

同書又曰 飯倉御厨 長日 御幣五十丁

東鑑曰 壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉寄附両村於二所大神宮去永暦元年二月御出京之刻感霊夢之後當宮事御信仰異他社然者平家黨類等在伊勢國之由依令風聞遣軍士之時者縱雖為凶賊之在所不相觸事之由於祠宮無左右不可亂入神明御鎮座砌之旨度々所被仰含也謂件両所者内宮御分武蔵國飯倉御厨被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主外宮御分

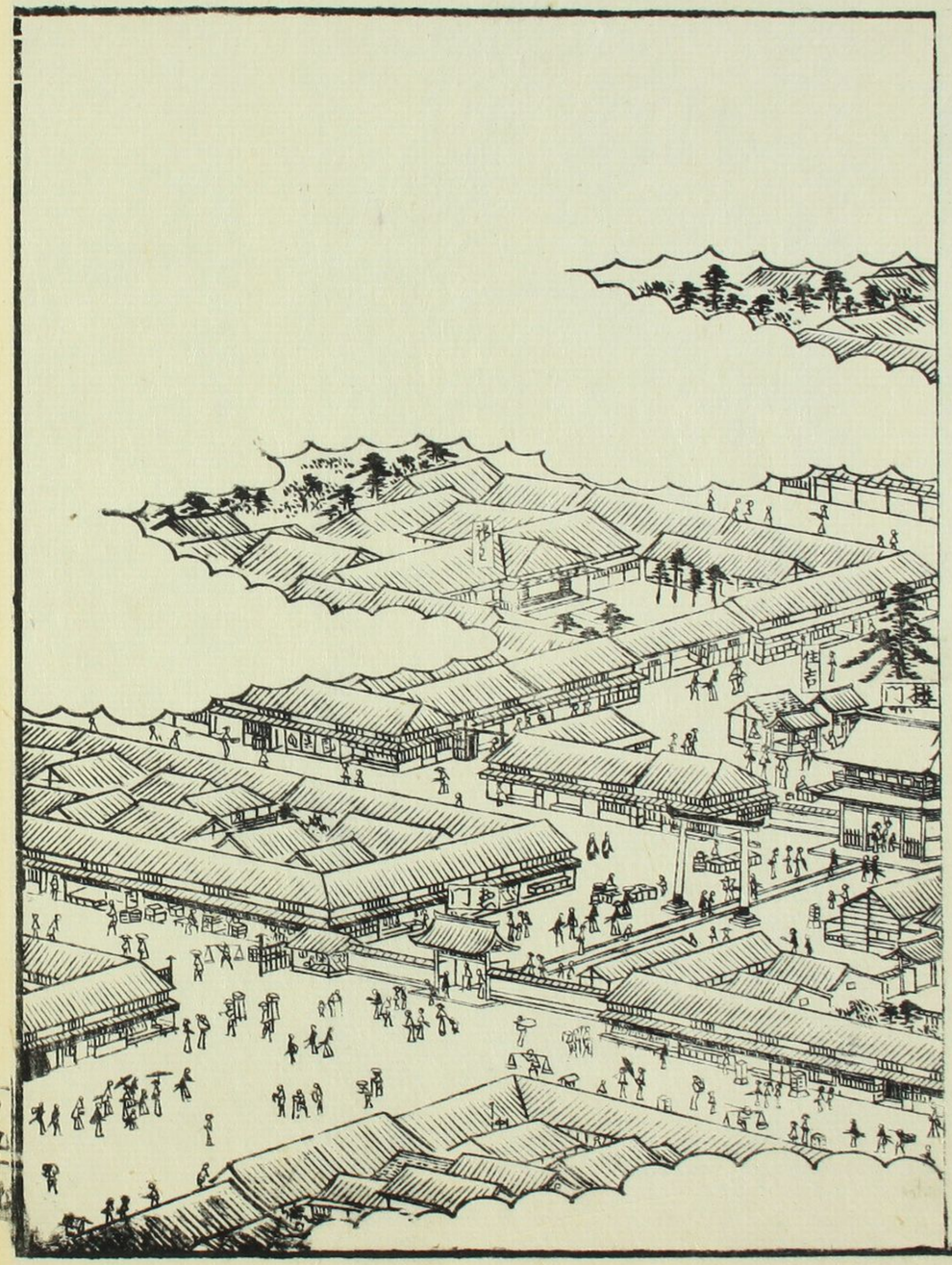

大こく
天王
春日
拝殿
本殿
別当

飯倉神明宮
世に芝の神明宮
といへり

安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣両通御寄進狀下畧

寄進　伊勢皇太神宮御厨壹處
　　在武藏國飯倉
右志旨奉爲　朝家安　爲成就私願殊抽忠丹
寄進狀如件

壽永三年五月三日　　正四位下前右兵衛佐源朝臣

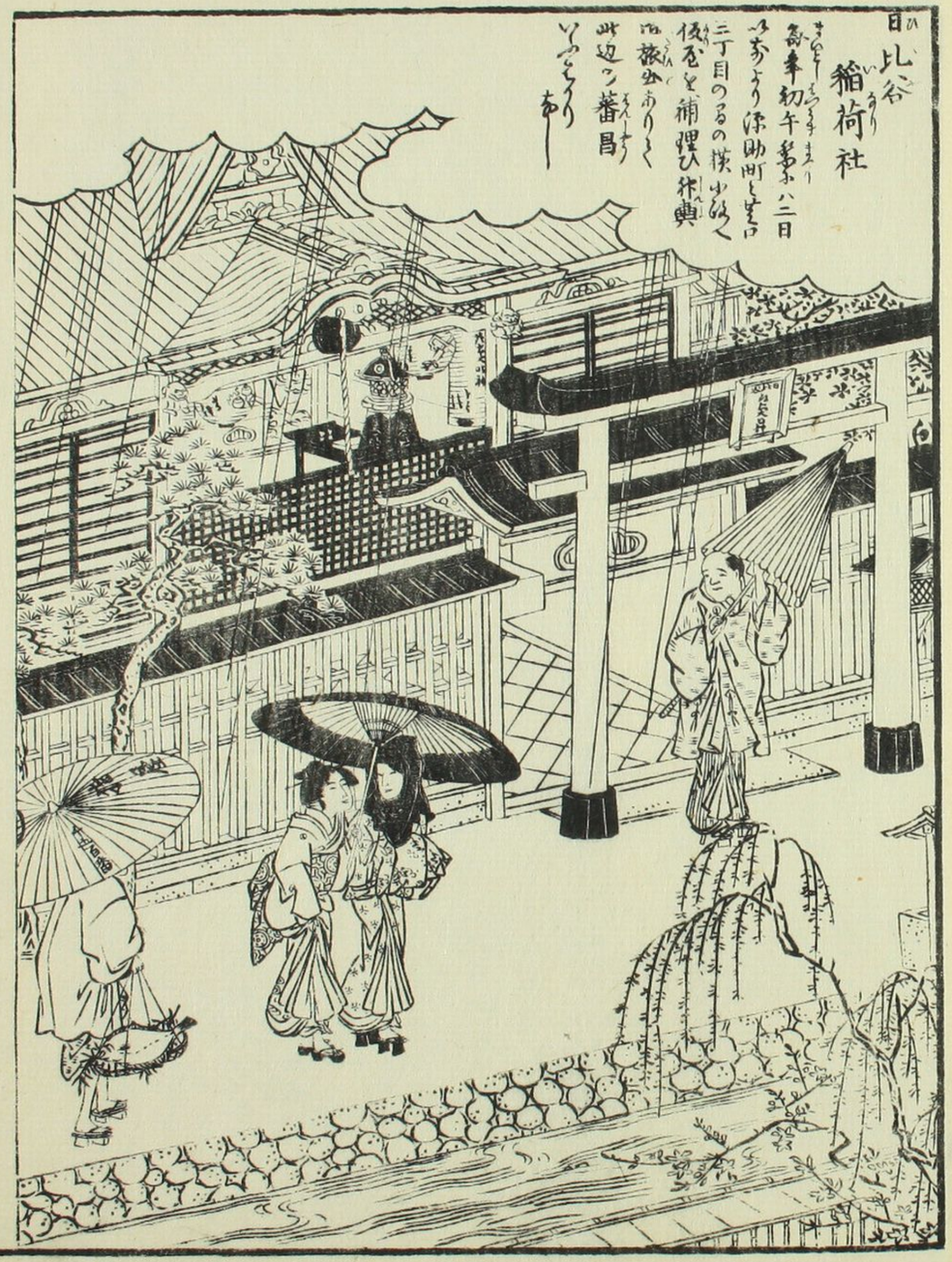


按ズ當社を飯倉神明宮と稱し八回飯倉の地より其地ハ西ハ三縁山今の飯倉天滿宮の社辺なり此地ハ伊勢太神宮の御厨ありしが地名を飯倉と唱へ又伊勢神を齊ひ祭りしゆゑ猶飯倉の糸下より拜なり又東鑑に同年正月武藏國大河土の御厨を豊受太神宮の御領に寄附のよし有あれハ一國の内ありしかゝふあるべし

社記云人皇六十六代　一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日
伊勢皇太神宮を鎮座奉る其時神帶と大刀一振此地に
あるゝ彼二種の御寶を此地に留めあるゝ天降る又此地の童女に神憑
ありて當社を當て其後建久四年癸丑右大將
頼朝卿下野國奈須野の原狩獵の時當社の神殿に寶劍

神宮御祭禮
御門前
氏子中
左好菴
奉御賓前

九月十六日
飯倉神明宮祭礼
御門前
氏子中
萬来
屋



一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附あり〳〵其頃繁昌の宮居たり〳〵ふ遥ふ後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北城主大森實頼を亡し〳〵後威を逞うせし頃是り為に神領を掠やられ依く宮社ハ霧ふ朽風に破もし奉祀のくもなく大ふ荒廢し〳〵を天正ふ至り四海昌平の御時恭くも台命ふ〳〵く當社の廢れしを興しまい神領若干を附せらるゝ又寛永十一年甲戌ふ〳〵と神殿を修造なし〳〵ふて社頭奮観ふ復す依神燈の光ハ赫〳〵と〳〵和光の月ふ〳〵へ利物の花ぬさハ白い深くして神威背ふ倍せり

當社の祭例ハ九月十六日なり同じ十一日ふ至るのゝ参詣群集を商ひ物多きゆゑ中あと蠟の花を画きる擔割菴ハ土生善殊ふ彫し故ふ世俗生善市又生姜祭とも唱へ江戸名所ふ数ハ題を鬻ふ す檜割菴を俗ふちきと名づく又生姜を賣るハ九月ふ拵をきるのゆゑ

宇田川橋　宇田川町の大通りを横切り流る小溝ふ架せり

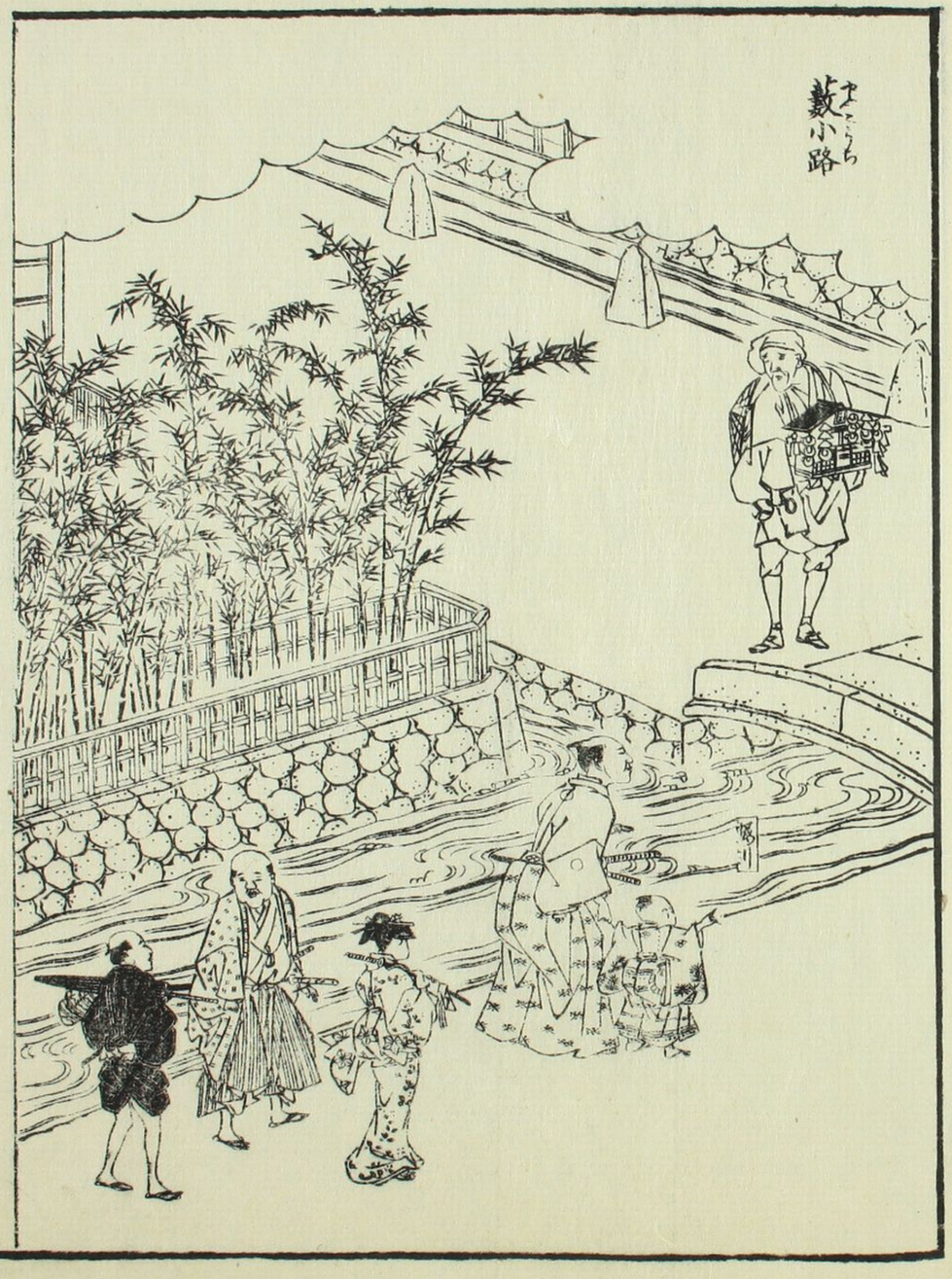
烏森稲荷社

今ハ上ハ土を覆ふ所ハ橋の形を失ひ宇田或ハ宇多ハ作る小田原北條家の臣宇多川和泉守と云へる人架せしと云伝へ小田原北條氏綱ハ責られ品川表ハ戦ひ元亨二年上杉修理亮朝興を亡し首とも実験ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者ともふ中に普請ハ沙汰せとあり東海道驛路銘ハ長禄元年丁丑四月八日太田道灌江戸鹿子ハ云ふ其後宇多川和泉守長清ハ品川の館ハ住とあり又元禄開板の江戸鹿子ハ云ふ此名ありとのへ共ハ草紙ハ昔此所ハ宇田と墮しるるなり

日比谷稲荷祠　芝口三丁目西の裏通ふあり此所町巾至て狹し土人日蔭町と字す

本山方比修験寂静院別當ハ萬治の頃藍屋五兵衛と云へる者託宣ハ依て花洛藤森の稲荷を勧請なせしと云ふ日比谷昔ハ比く谷ハ作る小田原北条家の所領役帳ハ比く谷ハ作る此地を大胡宮内少輔所領の中に加入

烏森稲荷社　幸橋より二丁斗南の方酒井下野侯邸の北北横通ふあり往古よりの鎮座とハ云へ共年歴来由共ハ詳ならず元禄開板の江戸鹿子と云へる草紙ハ天慶年間藤原秀郷将門退治の時の勧請なりとハ云へ共信しがたし又如何ある所あるや當社の神宝ハ古き鰐口一口を納む表ハ元暦元甲辰年



正月下河辺庄司行平建立と彫付てあり江戸名所ゝ日比谷稲荷の条下に云く此宮地ハ借地なりしふ既ふ断絶よりあり稲荷の神宮寺ハ告て古来ありし燈拠なりとて鰐口もとつくへき頃稲荷の神宮寺ハ此燈ハ宮居つくるとあるハ当社のまを誤れるくるるん狐或人云く明暦の田祿ハ奇瑞ありしハ其後社の廻陳地と社司山田氏ハ柳営御連歌の御連衆ゝ別当ハ快長院と号しく本山方の修験なるも祭禮毎年二月初午ハ執行ハ幸橋御門ハ假屋を補理て神輿を移ハ糸詣群集して賑ハ

古河御所

足利成氏願書一通 当社ハ蔵す

稲荷大明神願書事

今度發向所願悉於成就者当社可遂修造願書之状如件

享徳四年正月五日　左兵衛督源朝臣　成氏判

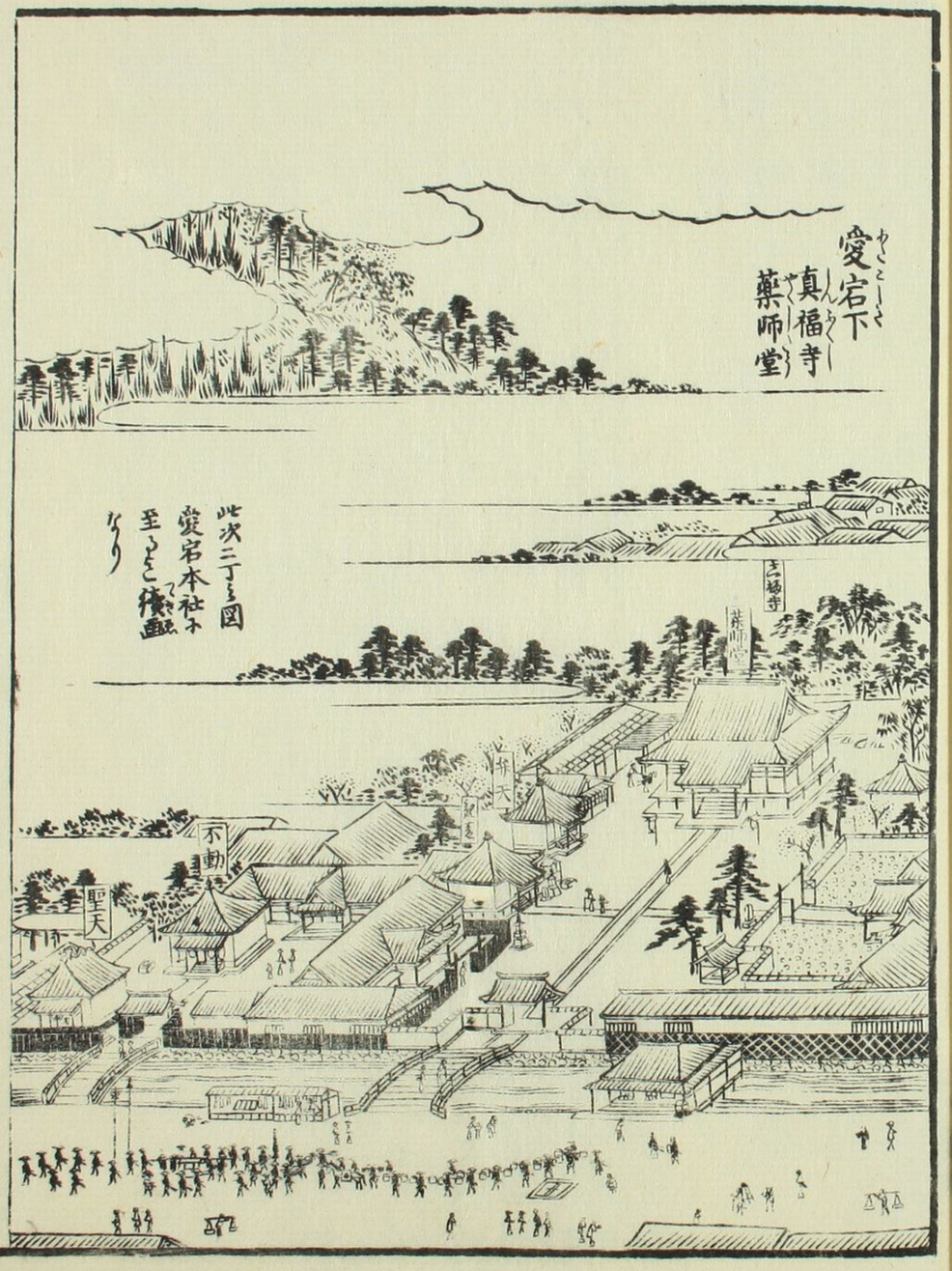
藪小路　愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通りを云同町民の隈裏門の傍ハ少しきりとれ竹叢あるも故ハ もついんりきれと其来由詳なるす傳説あれとも燈とまるゝ三斎矣此地ハ住せしとその庭中の小池を三斎坂と弱くとい慶長より寛永の頃ハ至る細川

櫻川　同所愛宕の麓を東南へ流れて溝川と云ふ名く新著聞集に昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑あるく畔に櫻樹幾株ともなくあるし其中を流れて櫻川と

とあり（下流ハ宇田川橋の方へ流れ又三縁山に傍く金杭の川へも落合へり）

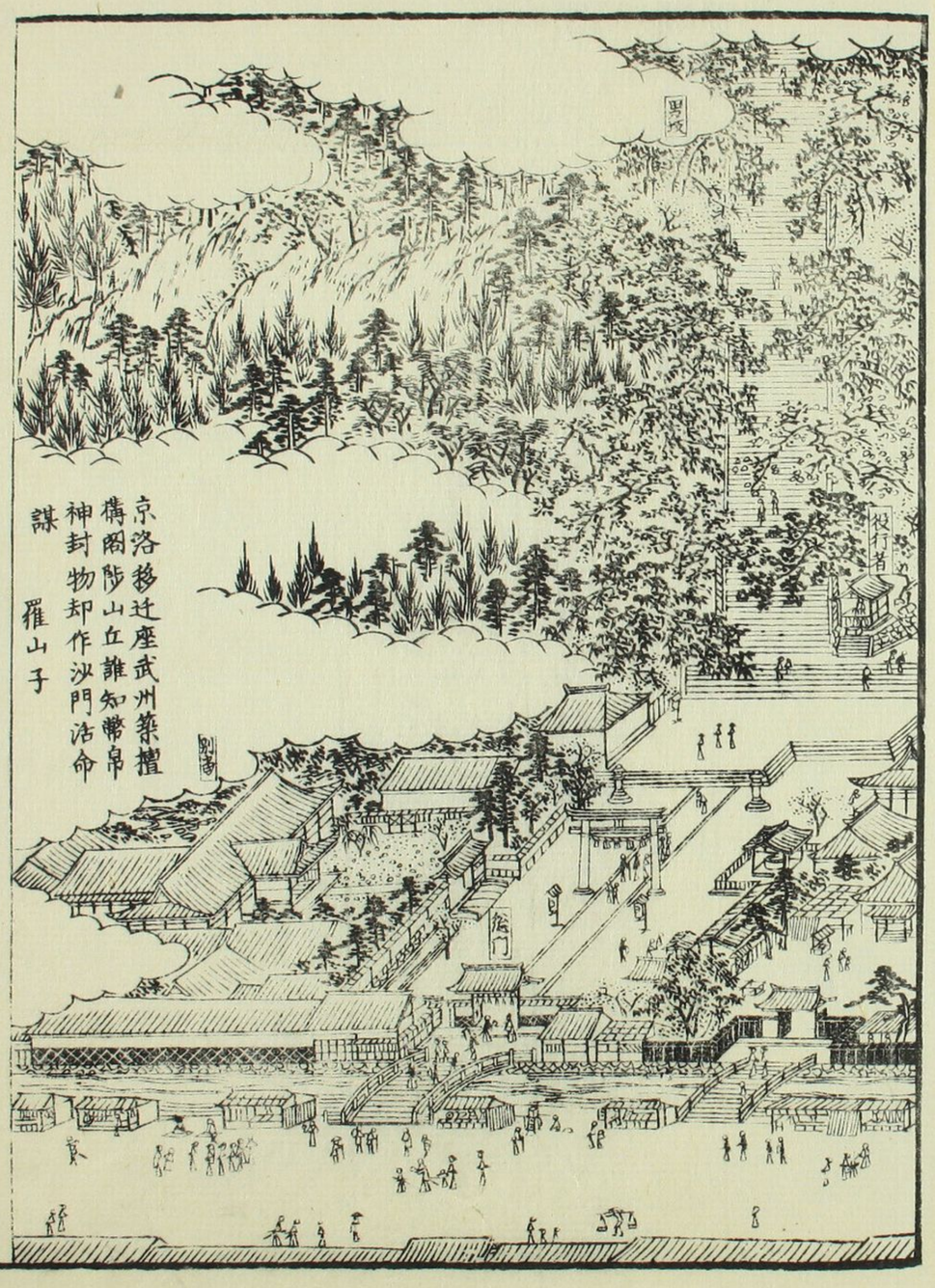
摩尼珠山真福寺　櫻川の西岸に傍ひくあるに新義の真言宗おくく江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり當寺本尊藥師如来の靈像ハ弘法大師の作なるに慶長の頃甲州の領主浅野長政當寺中興照海上人をして自らの等身に藥師佛の像を手刻せしめ件の靈佛をハ其胎中に籠するとい（毎月八日十二日八縁日にして參詣多し）

愛宕山權現社　同南に並ぶ世俗城州愛宕山に同じといへ共自ら別なり本地佛も勝軍地藏尊にして行基大士の作なり永く火災を退けるの守護神なり樓門の金剛力士ハ



愛宕社總門

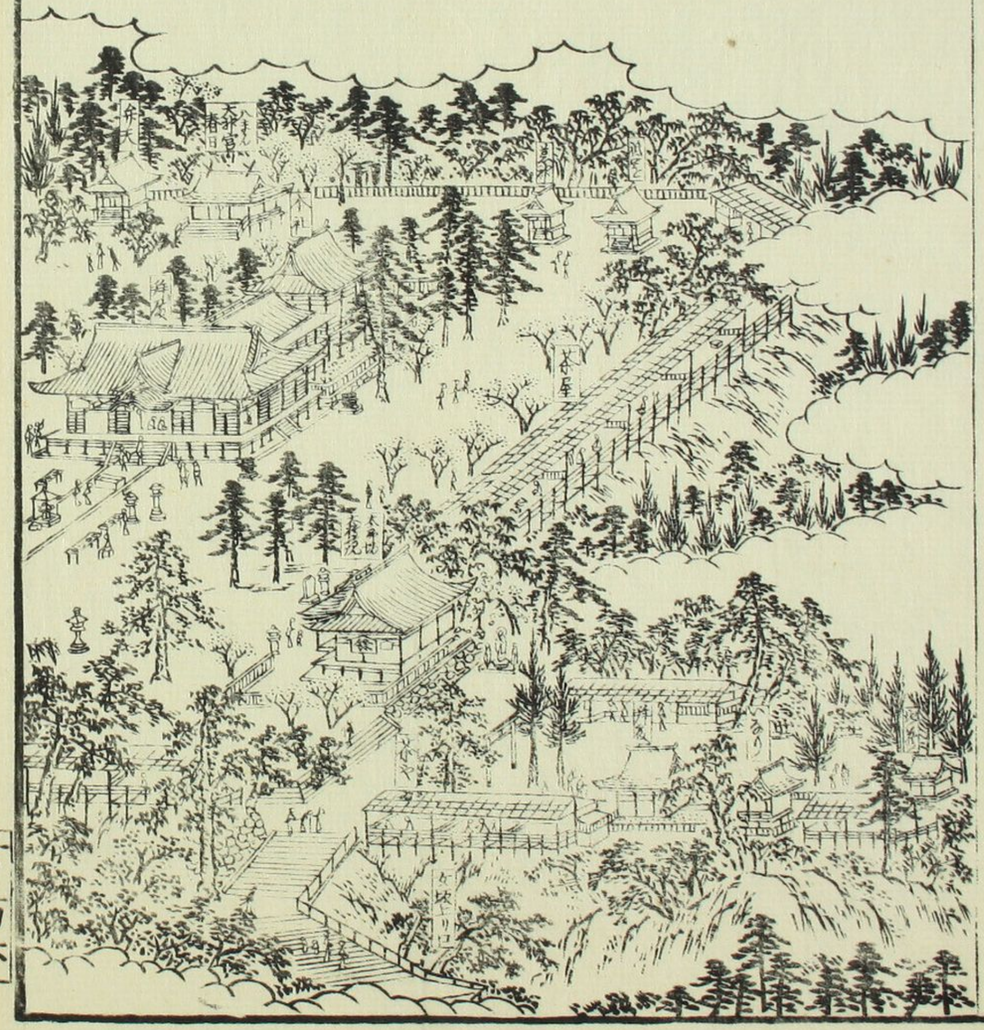
其二



京洛移迁座武州築檀
構閣陟山丘誰知帶帛
神封物却作沙門活命
謀　羅山子

其三

山上
愛宕山權現
本社図



宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連闕下
海雲一半傍城中
祇憐精衛仍含木
誰識鵬鯤忽擊風
羞殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公

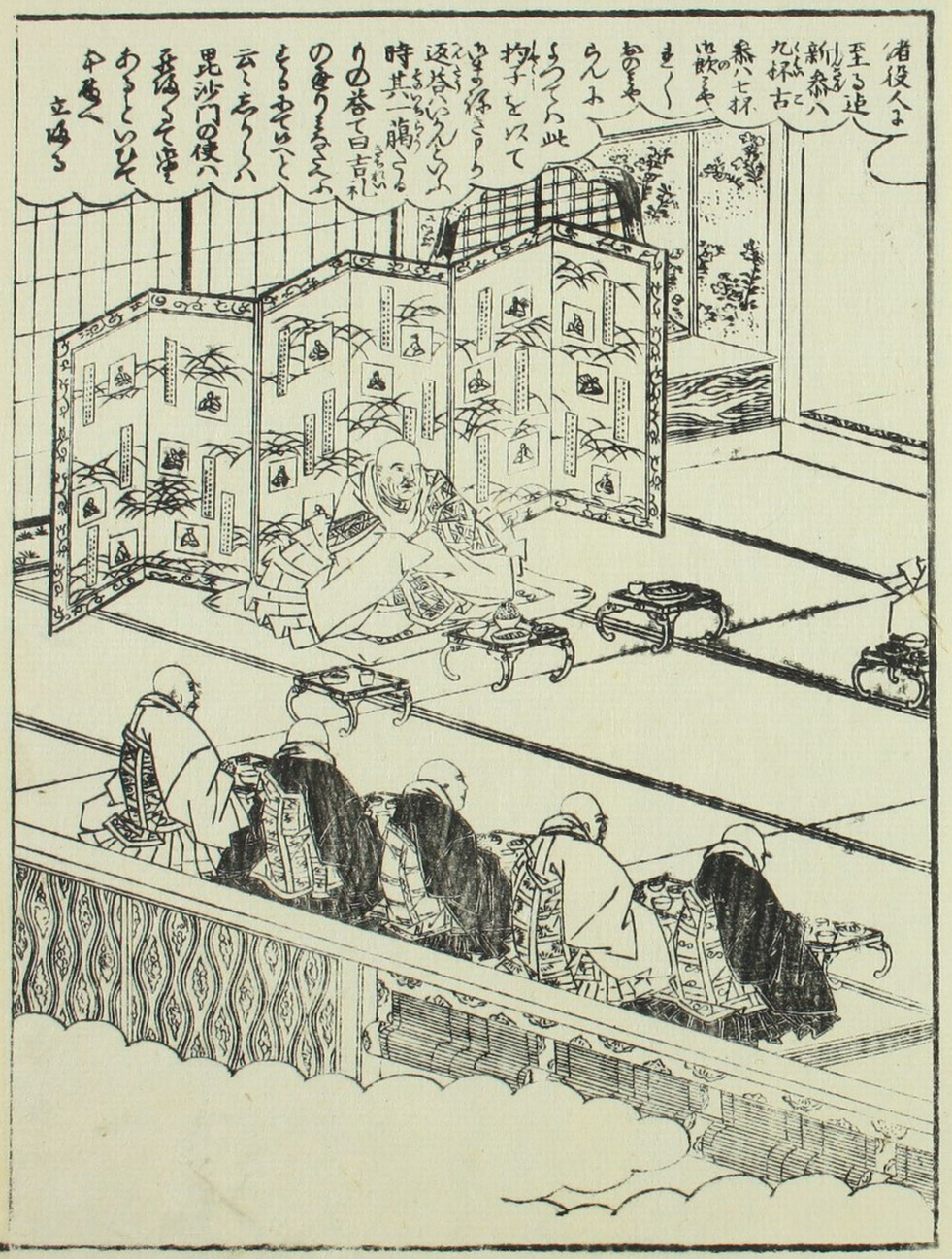
服元喬

運慶の作同二階の軒に掲し愛宕山の三字は智積院権
大僧正の筆なり別當圓福教寺は石階の下にあり新義の
真言宗江戸の觸頭四箇寺の隨一なり開山を神證上人と
號す二世俊賀上人なり（四箇寺とは湯島根生院本所弥勒寺
當所圓福寺並に當寺をいふ）

神證上人字を春音といひ後に春香と号し下野の人にして姓は
塩谷氏世々皆川氏なり元和五年鈎命に依て金剛院を退居をなす
天和年を終に春音の坊は遍照院と号す今の圓福寺是なり金剛院普賢院
満蔵院鏡照院壽桂院等なり六院あり俊賀上人字は圓精と号し野州
四方邑の人姓は越路氏なり宇都宮弥三郎頼綱の後裔父は伊勢守近律神
祠に祈て産す其始下妻の圓福寺に住せ然るに其頃下総結城の元寿上州
松井田秀等等一世の豪俊なり俊賀上人をあはせて新義の三傑と称せる
元和五年俊賀上人愛宕権現の別當に命せられ共に圓福寺の号を改て一宇を
開き永く大法幢を樹て大法鼓を擊て夏冬麁ろなる事なし終に檀林職と
なる学徒業を成す雲の如く集る起る実に江城檀林の権輿なり
縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺に化の時當
社の本地將軍地藏尊の像を彫刻しまひ後安部内親王に
奉る（第四十六代孝謙天皇の御宮村と名つく）親王則彼地に宝祠を營み是を安置かー
ゝ然るに天正十年壬午の夏台棋泉州を

発し大和路より宇治を経て江州信樂に入せ賜ふ此時
多羅尾四郎右衛門といへる者の宅に舍らせらるる頃あり
此像を獻ず（多羅尾家譜に曰常陸介綱和三好若江の三人衆と戰ふ其子四郎兵衛
光綱江州信樂を領す云々多羅尾は左京進光俊初て多羅尾と号す
あり四郎兵衛光綱入道道賀の子なり）其節同國磯尾村の
沙門神證なるを供せしに此靈像を持して東國に赴き
爾より御出陣毎に神證を此勝軍地藏を祈念
せしめる遂に慶長八年癸卯の夏台命により同庚
子年石川六郎左衛門尉當山を開き假に堂宇を造建し
其後同十五年庚戌本社を始て建立る元和三年
丁巳同國豊島郡王子邑に於て百石の社領を附しめ
る（惣鹿子といふ冊子に此地は元櫻田の村民内藤六郎といふ人の
宅也徒れ紅代に修せし地なり沙門春音慶長庚子の御出陣に勝軍の法を
慶長八年九月廿四日貴賤の恭詣を許す又同書に江戸名勝志同名所
又爰に始山城の愛宕を遠州鳴子坂に清夫駿州宇津屋に後に清寿
爰に安置す慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といふる人の勧請

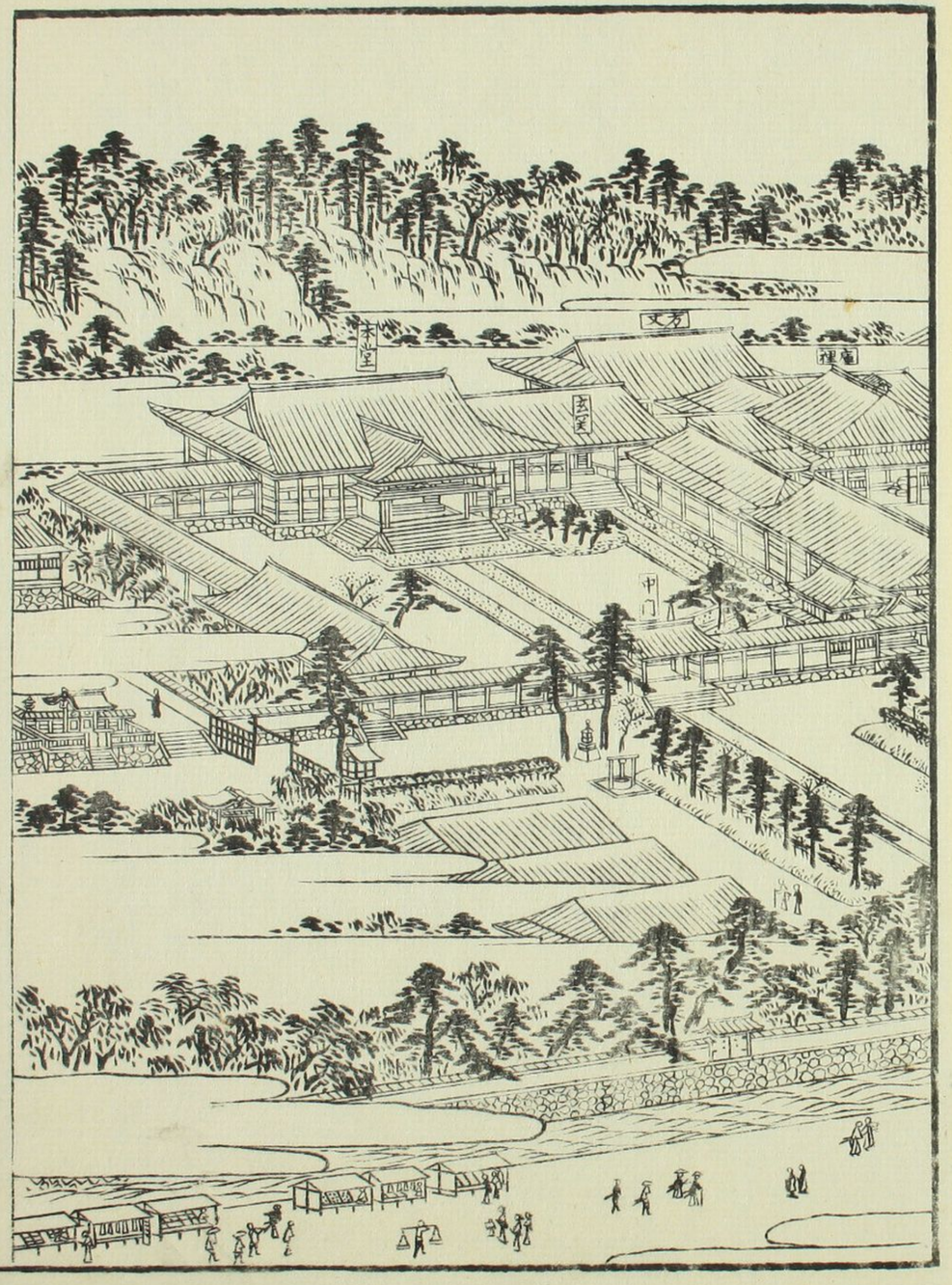
まゝり出る者ハ毘沙門天の使院家役者をしめ寺中の面ゝ長屋の所化も勝手の者役人ハ至る迄新参ハ九杯古参ハ七杯ハ飲ハ

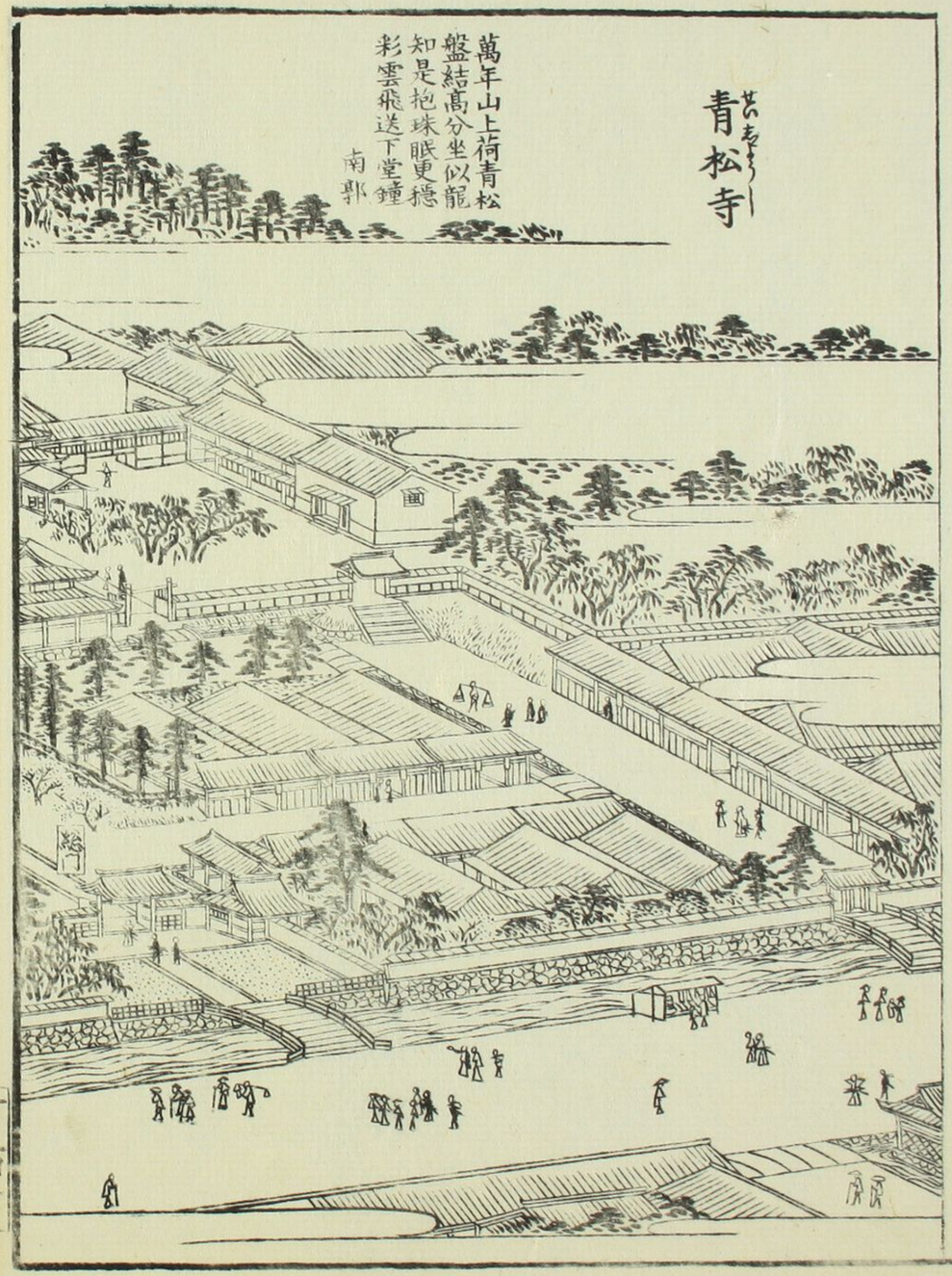


あり此説圓福寺ハ云伝なく澄と云ふ
今も本社の相殿ハ安置も無歳正月三日毘沙門の徳と称する奮祀の式あり其式四上ハ詳
なり按ハ當寺開山俊賀師ハ始野州ありの野州辺ハ俊賀上人より始るなるべし故
日光の古式ハ准して當寺ハ行ふのも恐らくハ俊賀上人より始るなるべし故
抑當山ハ懸岸壁立して空を凌き六十八級の石階ハ畳くとして
雲を挿ぐ巍巍然たり山頂ハ松柏鬱茂して夏日といへども
ちゝハ登るとハ涼風凛凛として炎暑を忘れる見落せば
三條九陌の万戸千門ハ覺えつゝ所せく海水ハ渺茫と
幼くして千里の風光を貯へ尤美景の地なり月ごとに廿四日ハ
縁日と称して参詣多くとなる廿六日廿四日ハ千日条と号
けて貴賤の群参稲麻の如し（縁日ハ植木の市立て四時共花木をうふ壮観なり）
萬年山青松寺 同南ハ隣る曹洞派の禅刺 ゝ江戸
三箇寺の一員なり本尊ハ釋迦如来開山を雲崗俊德大
和尚と云文明年間太田左衛門佐持資草創を初とす貝
塚の地ハ（或云天正文慶長元）後此地ハ迂さる故ハ今も俗ハ貝塚
青松寺と称せり

一ハ青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云く南向亭云く青松甲斐
と云人草創を其旧跡ハ糀町の貝塚當時玉虫八左衛門と云る屋鋪ありく
彼墓と甲斐塚と云と菊岡沾涼ハ青松宮内と云人の建立なりと云り又當
寺ハ太田道灌の塚ありと云た詳なるず
當寺の後の山を含海山と号く眺望愛宕山ハ絶く美景の
地なり惣門の額万年山の三大字ハ閩沙門道霈の筆
なり

勝林山金地院 増上寺の西切通の上ハ京師南禅寺の
塔頭なり南禅寺ハ五山の僧録と称せ
唐佛の聖観世音菩薩なり（或人云宋人陳和卿作なりとの
閑山を大業和尚と云（其頃碩学なりし毎月十八日観音懺法修行す）
都留の毛衣と云草紙ハ古ハ寺社裁許の祈願ハ五山の僧録司ハ兼せ
（寛永中より武家の職と云く）
称する古木あり今ハ焼亡して
頃の如く後此地へ閻魔王ハ石像ハ塔中二玄庵の前ハあり
載ると云
宝永の頃南部の領主盛尓ハ依て彼地より麻布の別荘ハ

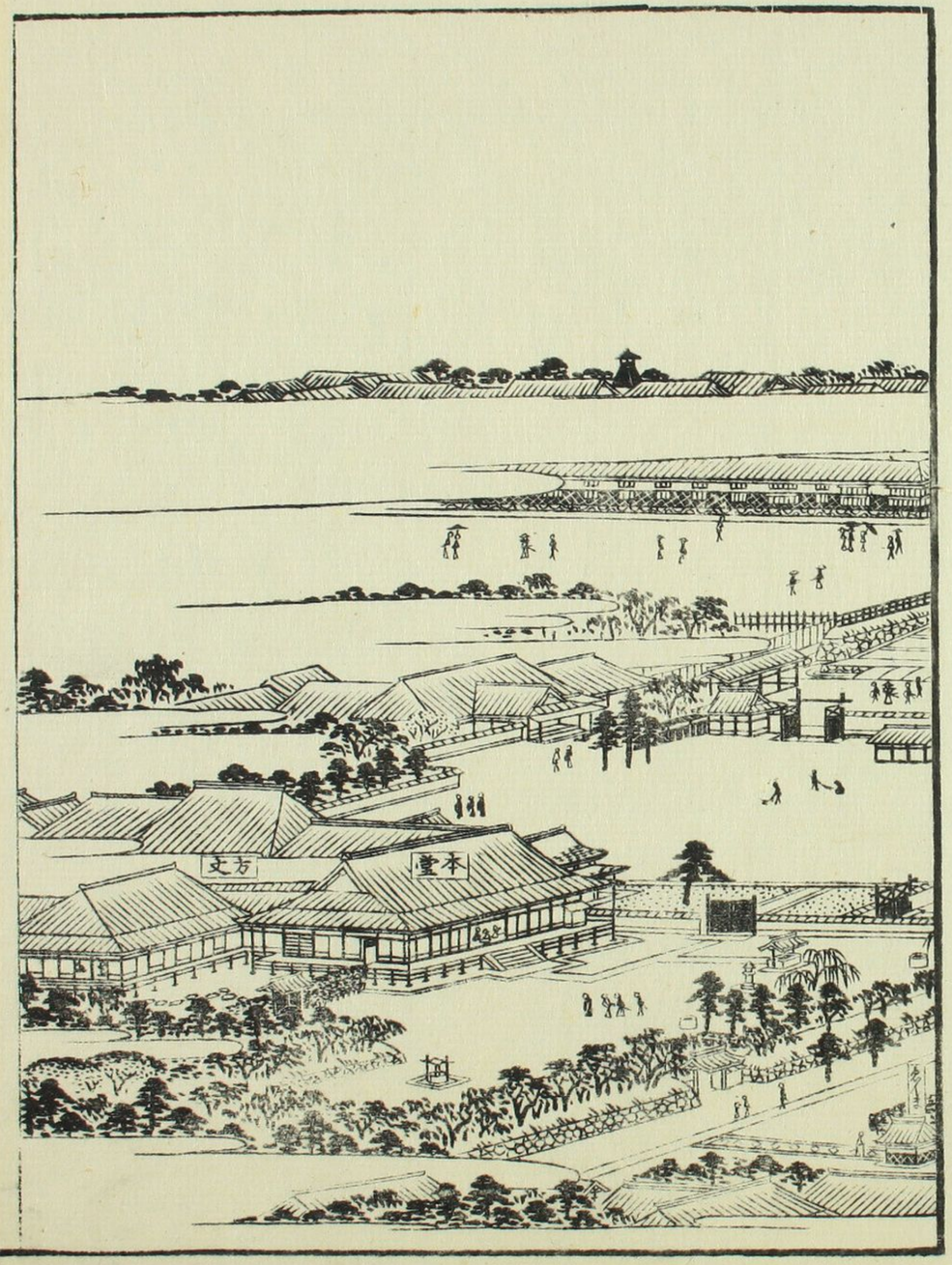

方丈
末山堂
庵裡
玄関
中門

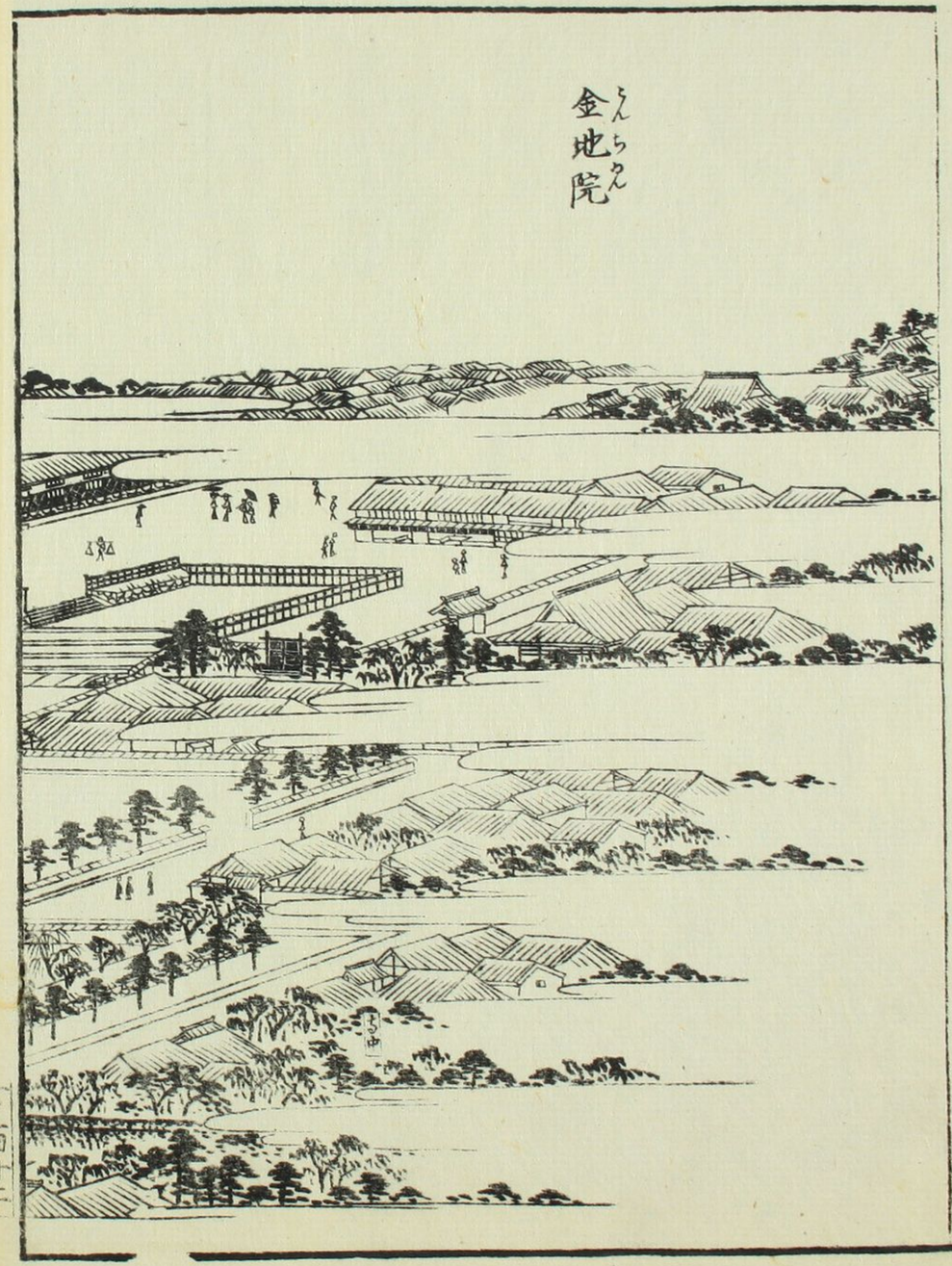

青松寺
萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭

迄されて再ひ威霊あるふよりまた又こゝふ安堵の金地院と書せ〜三大字の額を水雲寫とあるを方丈同淳溟筆薦福殿岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊観世音の像八大の月三月續くる中の月の十八日ふハ開帳あり

光明山天徳寺　和合院と号ハ西久保神谷町にあり花洛智恩院に属を浄家江戸四箇の一ゆく紫衣の地なるを支院十七字あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ三蓮社縁誉称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑ふ生る父を藤田左衛門尉道昭と云母ハ富永氏或ハ云冨田氏九歳にして甫て増上寺第七世親誉上人に従つて雛涙を聰明絶倫なり師の遷化に及ひて北總飯沼の弘経寺に至て鎮誉和尚に謁して浄土一乗の大戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉を志猶世塵を厭ふ後古郷に帰して天智庵（知或ハ又地に作る）を草創を今の天徳寺是なり（天文二年の草創と云）先師親誉を以て開山祖とし師に（自二世に居る）舊地を西丸帯城の邊世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひて浴の知恩院に至て傍に一精舎を建て住ハ是を一心院と号（一心院ハ念仏三昧の一本寺）昼夜不退に常行念仏を修し新に念仏三昧の法則を製し永世の標準とす今諸國厭悠の道場此法式をかく定矩とす（花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院挂の極楽寺田井の會念寺淀の念仏寺等を草創す少しのいの不断念仏の場）天文廿三年の秋一心院に寂を實に七月十九日なり化壽四十一と号えし（今世間用ふ所の二連数珠も師の製なるの徒此念珠を用ひ）佛号を唱ゆるの徒

城山西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の城跡といひ伝へるを誤なるへし昔熊谷氏の人此居宅抔を地なるへし同所神谷町にある石橋を熊谷橋と号るも故あるへしと今傳説詳なるす（菊岡沾凉云此所ハ昔麻布殿とやの出丸の地なりしと云）


本堂
方丈


金地院

太田道灌城跡　或ハ番神山と号し西窪仙石家弟宅の地なり
紫の一本よりも太田道灌取立て城地なり　又昔此地ハ小堂
とゝ　今も土取場なりしに崩せしと云ふ
あるゝ土佛の釋迦を安置し法華堂と号く後豆州玉澤
法華寺の日朗上人持念する所の墨画の三十番神の画影を
携来るゝ堵人を結縁を然る小田原北条氏後ハ社を建く
彼番神を勧請す故ハ番神山とゝ　其画像ハ後京師に
移せとゝ

西窪八幡宮　同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町
一丁目よりの　別當ハ天台宗中ゝ東叡山の末八幡山普門院
と号し西窪の鎮守ゝ旅所ハ小山あり相伴ふ當社八幡
宮ハ寛弘年間の鎮座なりと　慶長五年関原御一戦の時
崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書をあま
らと別當秀圓御祈禱修行ゝ其奇特ありしハ

寛永十一年甲戌二月後より宮社御建立あるべしとて祭禮ハ毎歳八月十五日なり

飯倉　西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地なり故に其御饌料の稲を収めし倉を飯倉と唱へ来りしを地名に呼ぶなるべし

永禄の頃小田原北条家の臣大草左近太夫地を領せしに北条家の所領役帳に飯倉彈正忠太田新六郎島津孫四郎此所の北条家遠山左衛門太夫政景元亀二年江戸に五十五貫六百八十五文の地を彼寺に寄附せし地なりとあり猶前の芝神明宮の条下も其輸大蔵に寄附せし地なりとあり此中三貫三百文ハ以前より神鳳抄東鑑等の書を引據て照合せるなるべし

熊野権現宮　飯倉町にあり或人云養老年間芝の海濱に勸請あるべしを遥の後今の地に移さるるとて別當を三集山正宮寺と云天台宗にして東叡山に属せり

勝手ヶ原　工器町より赤羽へ出る廣小路の辺をいふ昔ハ三田の方へ行く廣漠の原野なりしハ太田道灌江戸の城より

飯倉
熊野権現社

勢を出す時ハ此所ハ人数を揃らるゝ所となる

赤羽川　渋谷川の下流なり　新堀と号く　延宝江戸図ハ麻布新堀とあり　元禄絵校

の江戸鹿子といふる仲紙ハ此河の上ハ赤羽の池と云あり　江戸名勝志ハ溝口信濃守伊達美作守

たるべしとあるの両説　元禄の始釣命ありて是を堀らしめ

赤羽橋　同し流ハ架を按ハ赤羽ハ赤埴の轉したるなるべし狭

此辺茶店多く河原の北ハ毎朝青市立て繁昌の地あり

心光院　同所橋より北の河原道　右ハ増上寺北別

院ハ宝暦の頃　縁山より此地ハ移る　其旧地ハ涅槃門当の辺なりと云

寺ハ鎮西上人の古跡ハ常行念佛の道場なり　恵照

律院光阿上人開基　光阿上人ハ横連社縁誉心岩頑夢と号し

流ハ投しく新深流頃ハ嗣法を宝永三年　加州小松の人姓ハ加彼氏越前浄光院の随

系図ハ加州六日寺及ハ当寺兼恵照院等ハ基し不詳　寂しく由傳燈

大引　観世音菩薩　境内ハ安を本尊ハ馬頭観音わしく　増上寺の引者ハ周

長重奥州二本松ハ在國の時ハ日城下ハ熊野道者の馬ハ乗　慶長の頃　丹羽五郎九郎　肩

其馬駄ハ農人ハ長重乗試ハ異ハ名馬なりしハ則名を

道者と唱ハ絶ハ　大将軍家へ献を駈を追せの小布一端を後輸の盥手

両方ハ引ハ附ハ小布一文字ハ齧る故ハ改く布引と命せ愛し

ハ彼馬斃るの後増上寺境内ハ埋めく石塔を建し其後又

件の石塔を本尊として馬ハ観音ハ崇むるとなり宝暦の頃寺と共ハ此地へ

引れしと

竹女水盤　新著聞集ハ云江戸大侍馬町佐久間勘解由ハ召仕の下女たけハ

天性仁慈の志深く朝夕の飯米ハ分ハ乞丐人ハ施し其身ハ

水盤の角ハ囲を置く洗ひ流しの飯を受け其溜を自分の食料を

常ハ称名怠る故ハ彼竹女ハ常ハ網を掛て置し

水盤ハ今増上寺念佛堂心光院の門の天井ハ掛くあり件の水盤ハ米

明を被ちこれハ当寺の縁起の中ハ詳

芝浦

本芝町の東の海濱をいふ芝口新橋ハ南田町の邊迄ハ

惣名なり上古ハ芝を竹柴の郷といひしを後世上略して柴

とのみ呼来りて又文字も芝ハ書改しなり　更級日記ハ竹柴の

猶三田済海寺の条下ハ詳なり南向亭云芝といふハ彼地の古老の説ハ海岸

近き所ハ柴を建海苔のかをとるを柴といふ地名なりよし

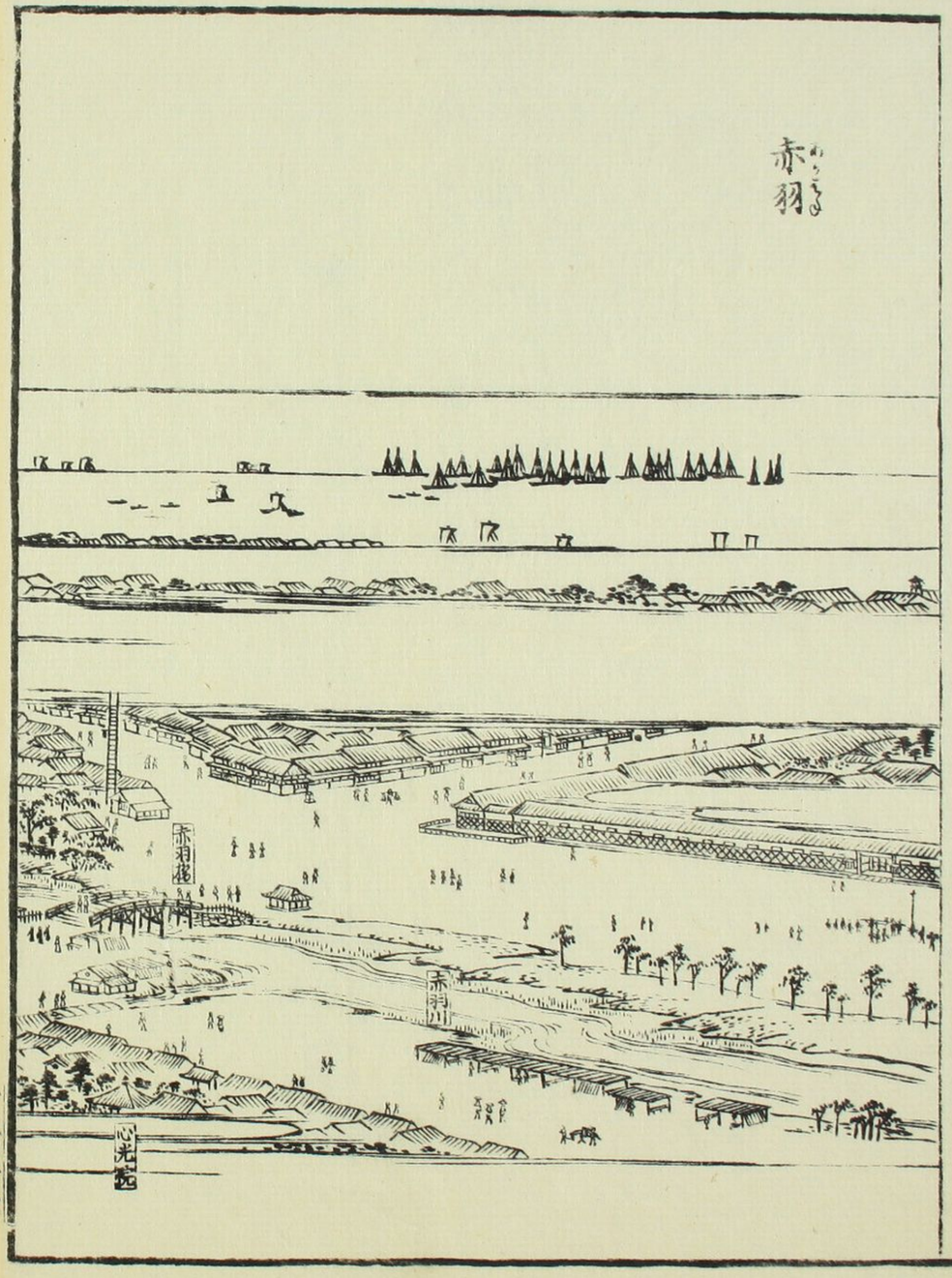
後芝ハ改作るなと云く按ハ此説是かなり

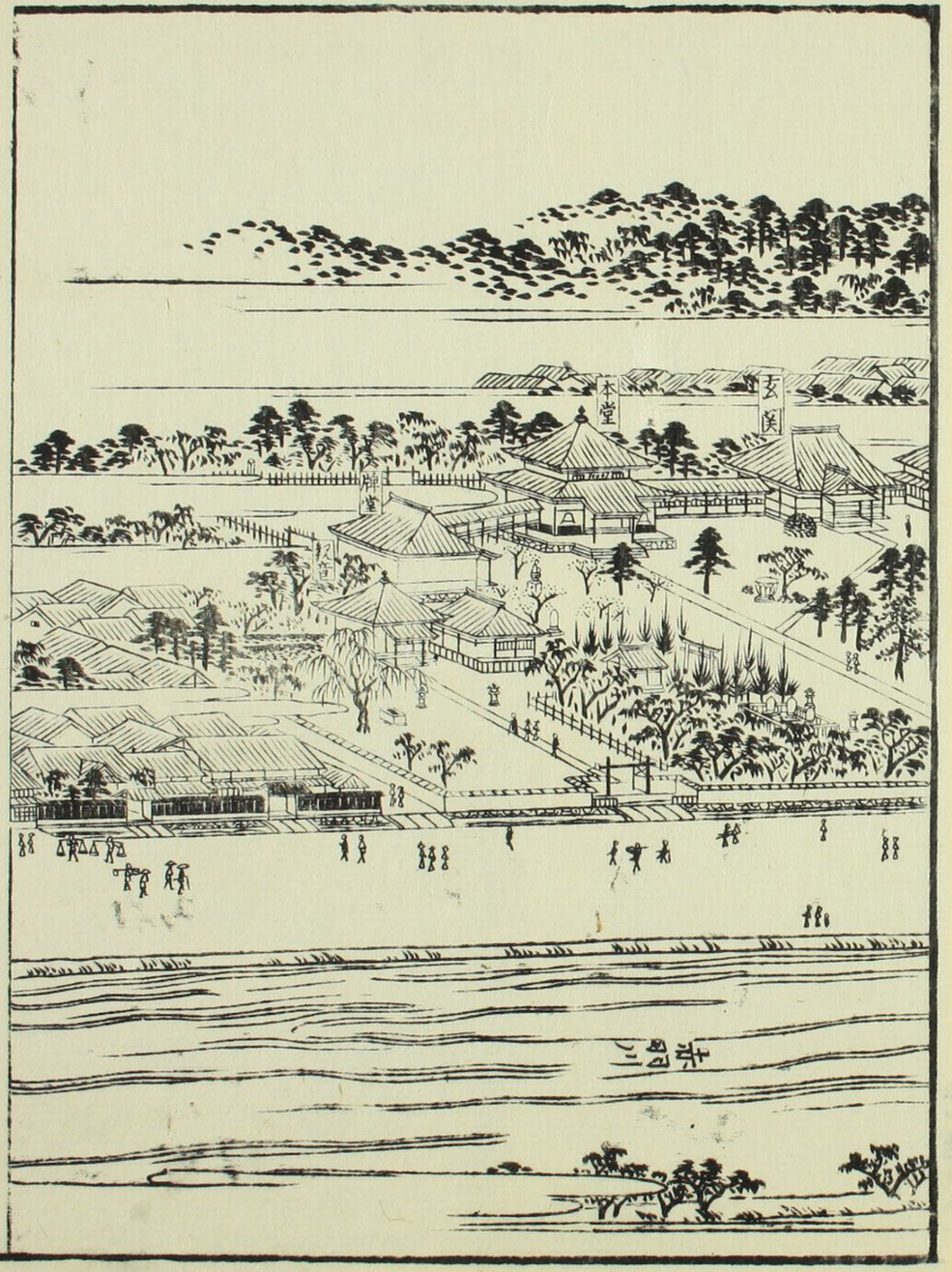
昔ハ今の品川わハなりしハ古へハ海苔をとるを元浅草の辺の

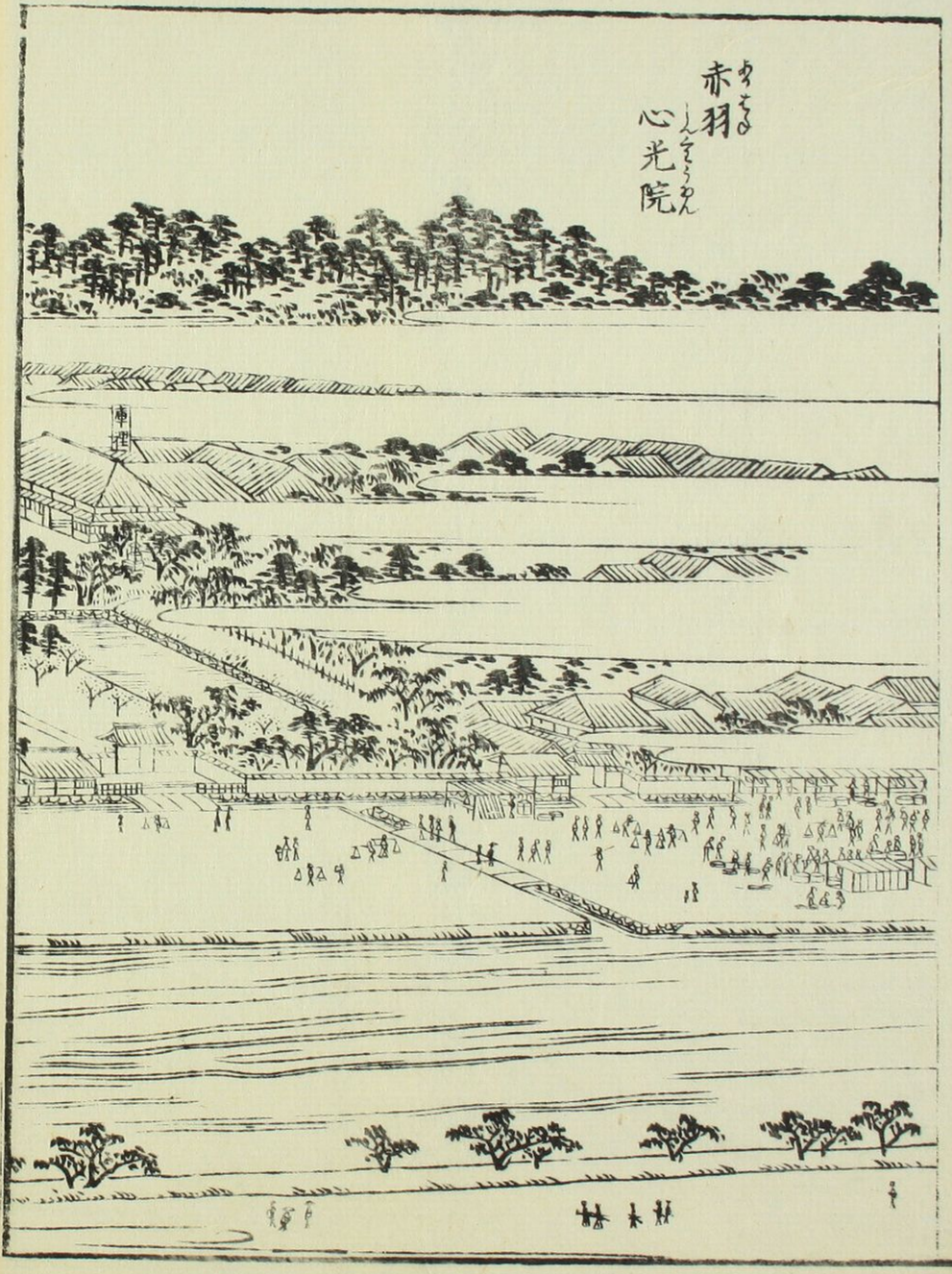
此地を雑魚場と号け漁猟の地なり此海より産するを芝

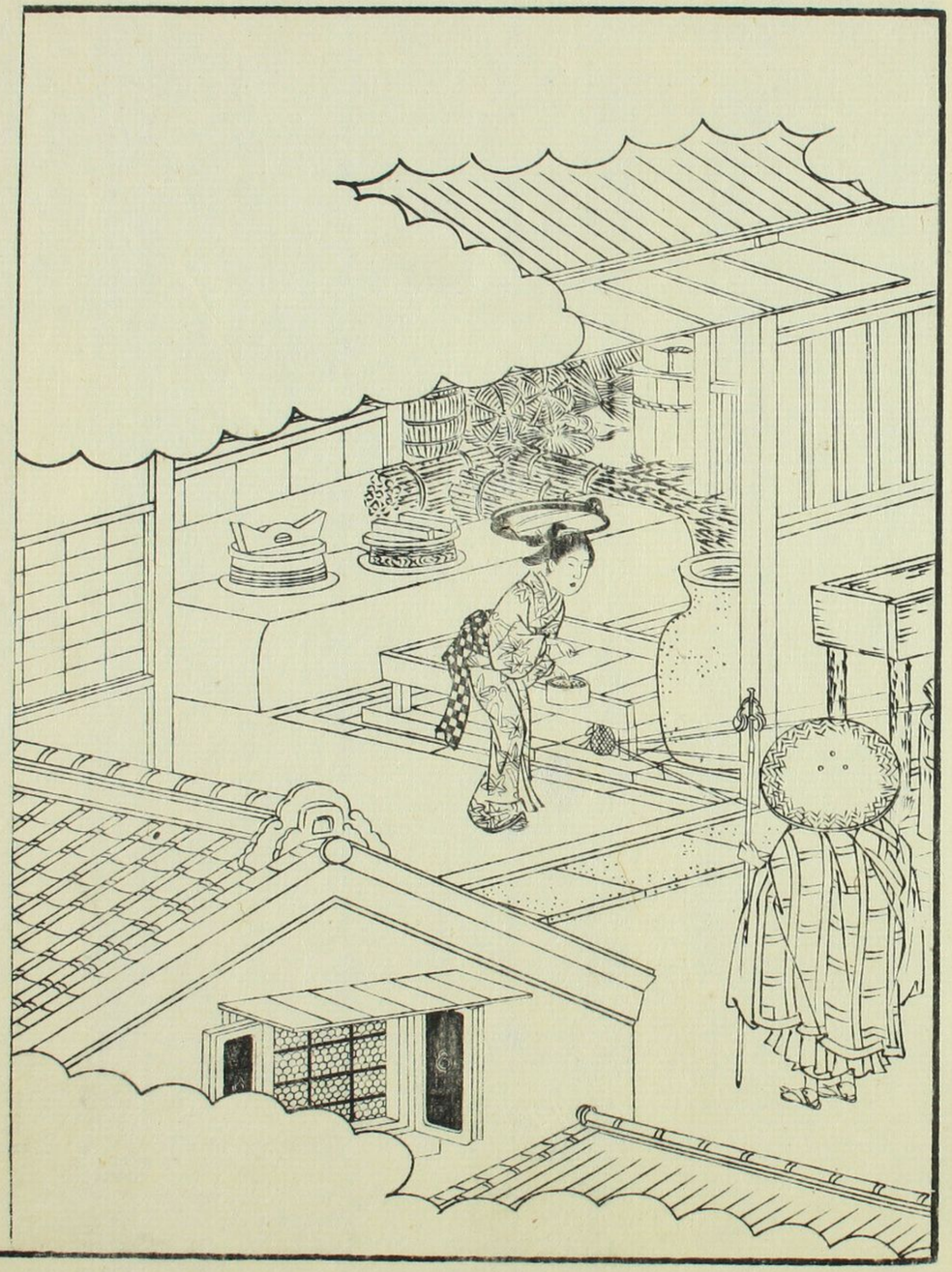
有と称しく都下ハ貴せり

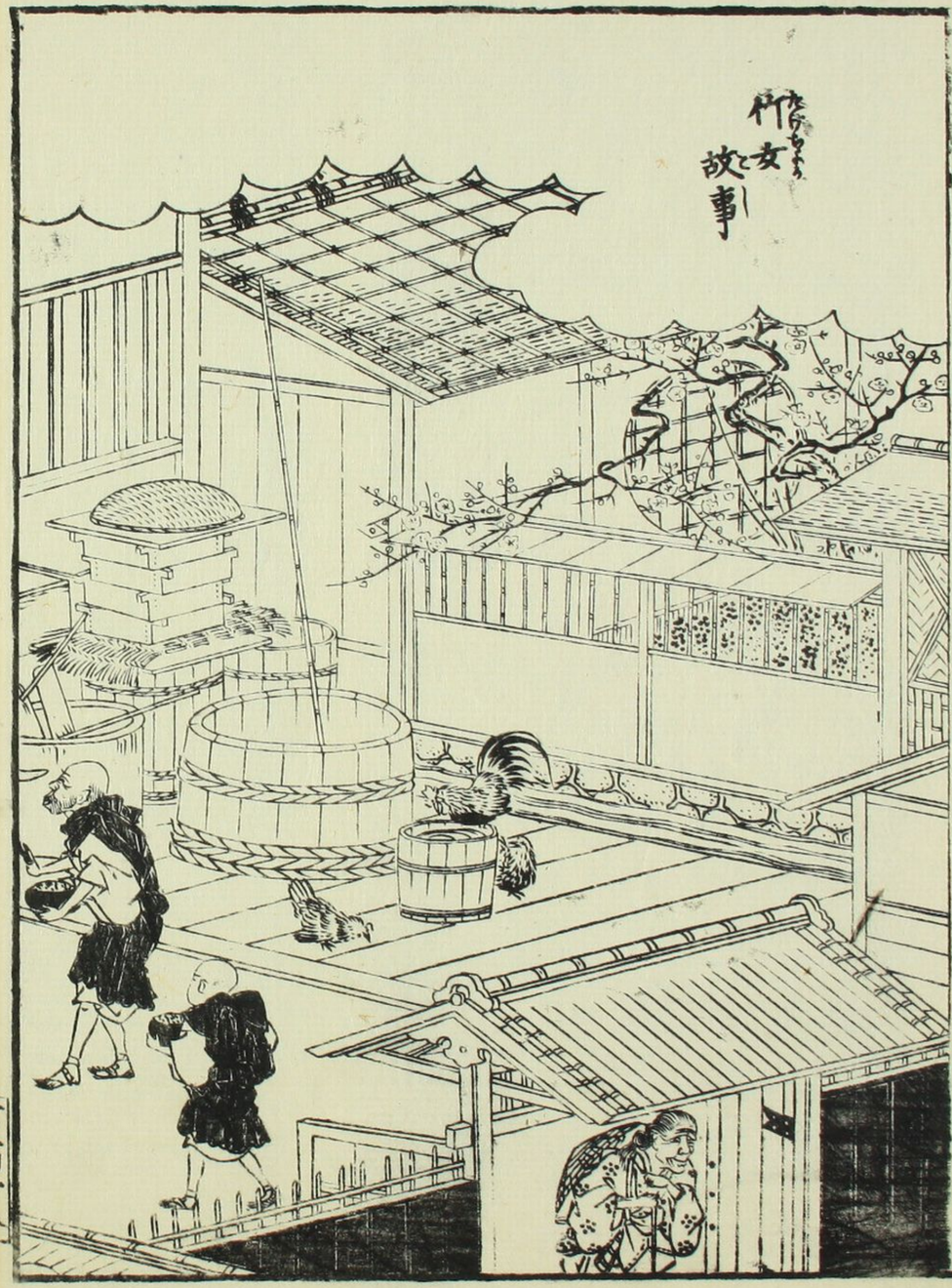
丹鳳城南赤羽灘
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀臺色
麻谷流侵碧海春
客裡攜家羞白髮
人間〻地避紅塵
此年車馬休相汚
沐罷聊戴頭上巾
南郭
芝浦
清上寺
山内


赤羽
赤羽橋
赤羽
沙光西


本堂
玄関
鐘堂
経堂


赤羽
心光院
車庫




竹女と故事

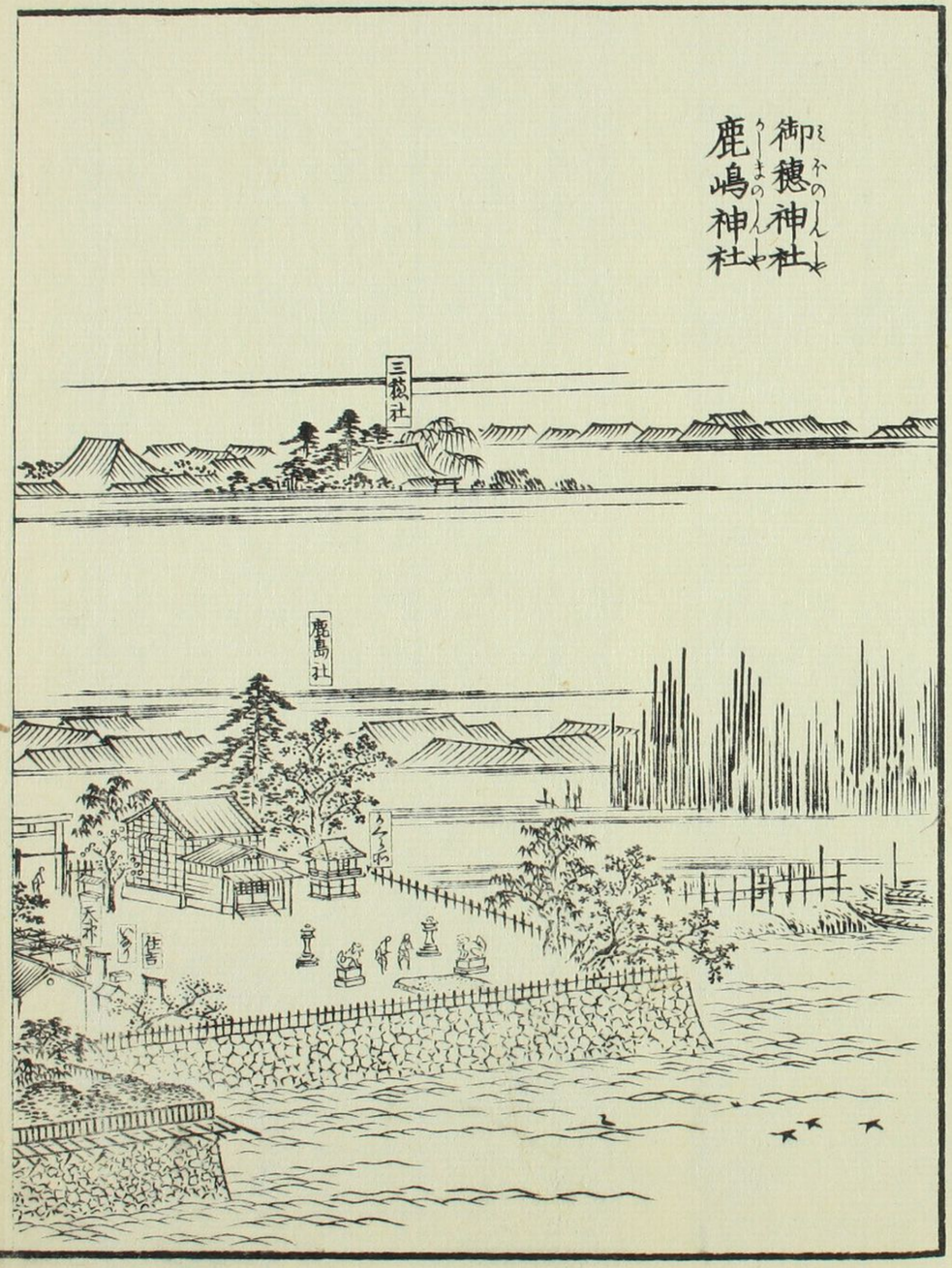
平安記行　文明十あまり二年ゝ頃水無月のそしめつゝ土さく
さけくとう旅人のやゝしきりのせゝ避暑の床をもるれて
都ゝまうのほりね中界芝といふ所を過るとて

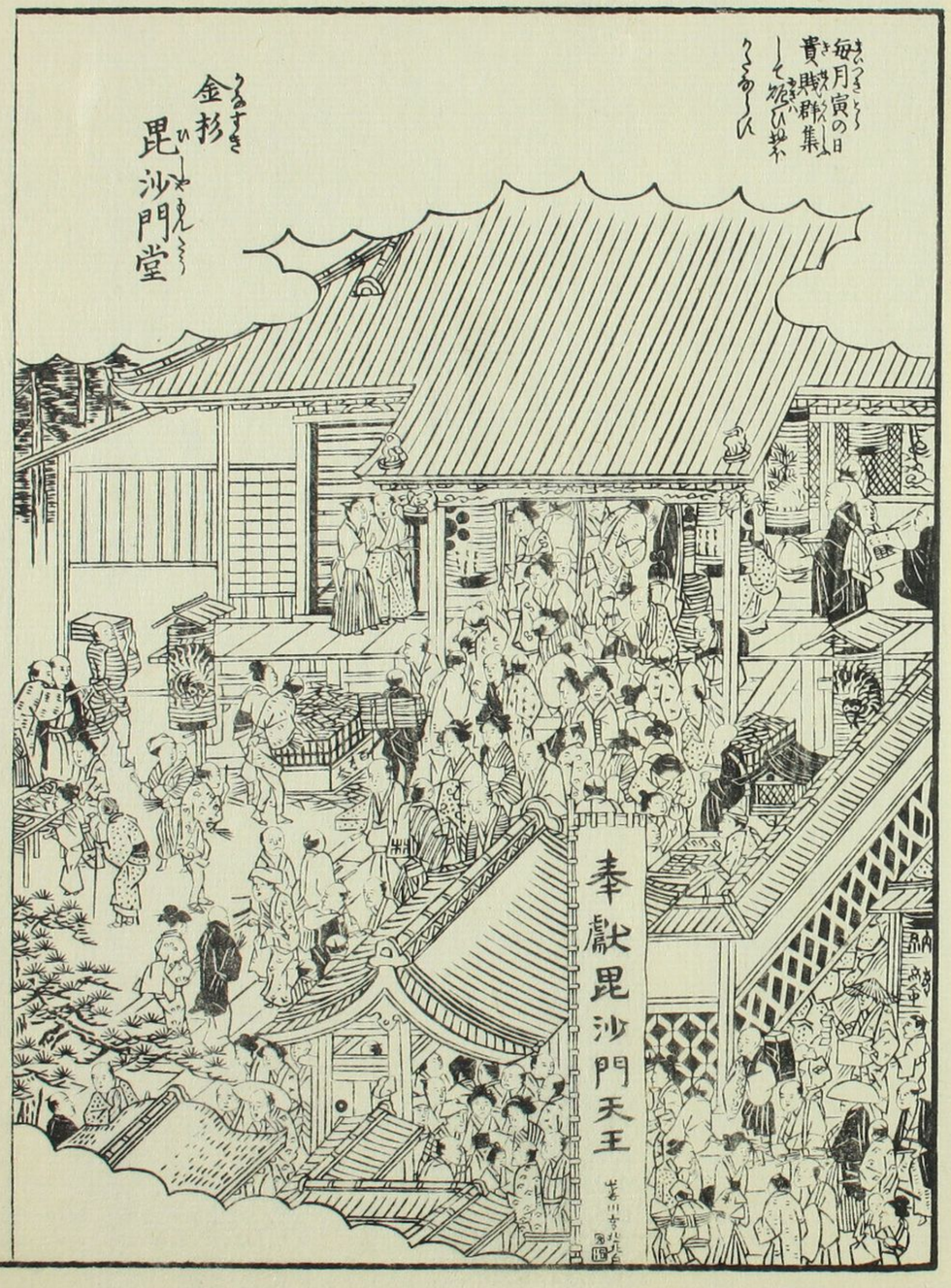
霧ゝ〻ゝき道の芝生と蹈ちらゝし駒ゝ任せるあきくれのそ　太田道灌

田國雜記　芝の浦といふる所ゝのうれハ塩屋のくりうちなひき
て物淋しきふ塩木ゝとふ舟とりを見て
やゝねうり藻汐の煙名ゝを立舟にこりつむ芝の浦人　道奥准后
此浦を過くゝあら井といふる所ゝて云ゝ

芝といふもの〻候夏さしも　梅翁

御穂神社　同所ゝ芝通りよりて西の横町ゝあるゝ本芝社
産土神ゝ〻〻〻祭禮ハ三月十五日なるゝ別當を正福寺と
号す天台宗すて東叡山ゝ属を侍へ云往古駿河國三穂の
海人此浦ゝ来ゝ住を故ゝ古郷の御神あれをとて文明
十一年庚子のとゝ〻ゝ當社を勸請せゝなり祭神
御穂津彦御穂津媛ゝ二神なりとゝ〻ゝ土俗當社を
瘡瘡の





守護神と祈願

鹿島神社　同所海濱よりも別當ハ御穂神社に相同し

祭禮も又同しく三月十五日なり土人傳へ云寛永年間此浦より一の小祠漂流して汀より止るあり漁人これを揚て其所を尋るに常州鹿島大神宮の社地より流し小祠なり

又其頃十一面観音の木像同し海汀より流よりしうハ鹿島明神も十一面観音をいろく本地佛とせしかれハ是ふたつきく當社の御神を勸請せしなり

毘沙門堂　金杉の通り東の方の横小路にあり松林山正傳寺といへる中山汎の日蓮宗の寺境内にあり本尊ハ傳教大師の作やうく後日親上人再ひ點眼供養せしかとそ往古ハ摂州梶折邑一乘寺といへる寺かありしかとも僻地やうく結縁の人少し　一乘寺ハ金仙寺といひし真言の密場なりし日親上人の弘教に帰して本化の宗に改む

依て寛文の頃衆生化益の為日栄上人こゝに移し来るとなり
霊験感應の著しきことハ寺記に詳なり故に糸詣の貴賤日こゝに
多く寅日を殊に群集せり　正月初の寅日糸詣の人大方ハ芝の神明宮の門前に遂石を買て家土産とし是を春岩に準ずといへり　日親堂　日親上人の像を安置
洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月初の寅日詣る輩ありて遂石を買て帰る輩ありて霊験著し

田中山西應寺　金杉の通より西の裏にあり　門前を西應寺町と呼ぶ　浄土宗ゆ〻しき三縁山に属し支院三宇あり　本尊阿弥陀如来の像ハ慧心僧都の作なりと云伝へ應安紀元戊申の年明賢上人草創を明賢上人ハ應永五年戊寅黄鐘十日に遷化せ年八十六歳といへり　天正の頃　大将軍家当寺に駕を枉られ寺領御寄附あるしるハ学徒朝夕の助覧ゆ〻しく学道盛なり　又当寺十六世存冏和尚一宗北碩学ゆ〻しく当時法門の龍象学道の麟鶴なりされハ　大将軍家深く崇敬ましく〻ふかく台命に

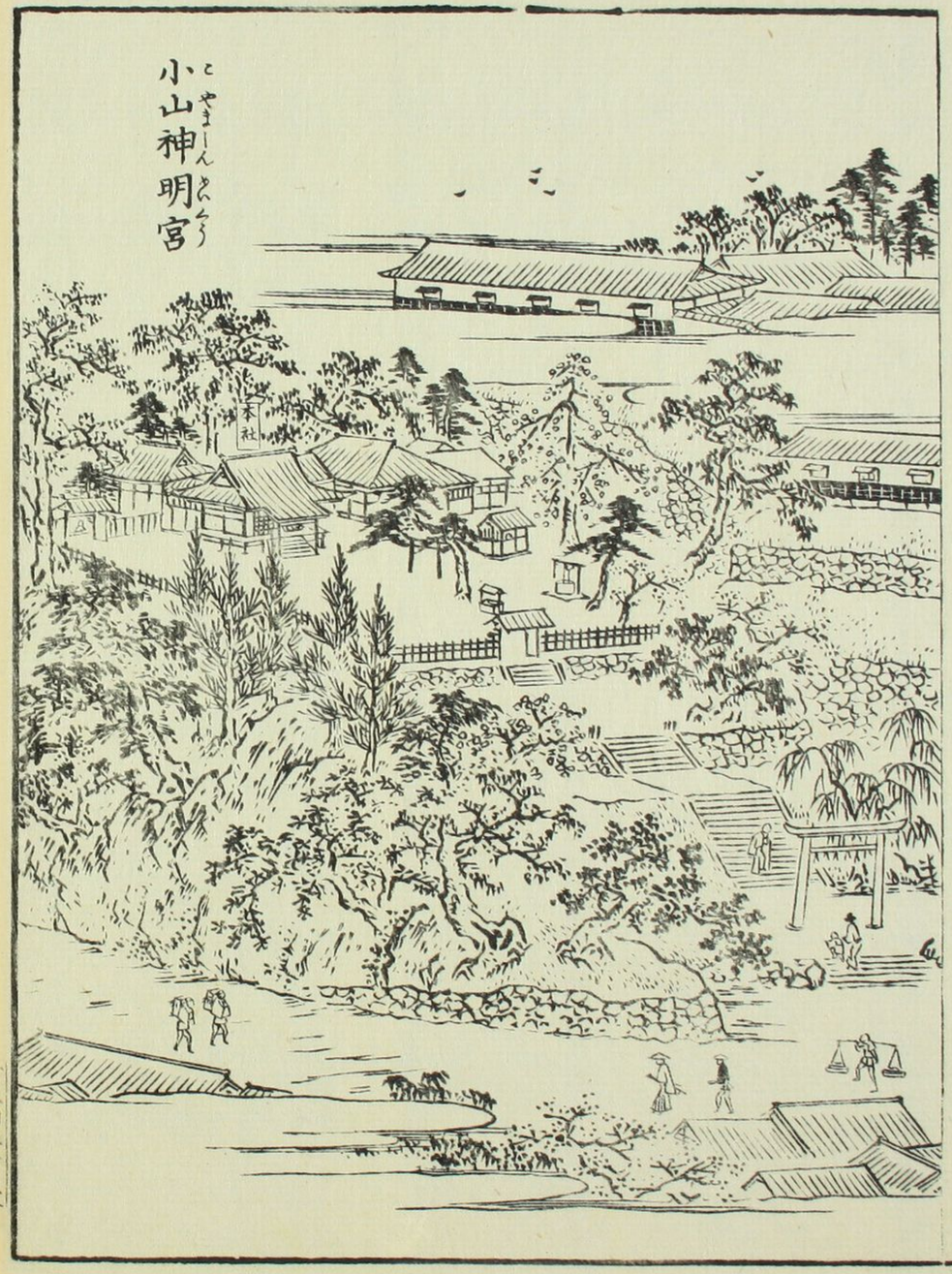
依て一夏の間法幢を建て一百餘人の衆僧に宗風の法意を示をすゝめ念佛三昧他力往生のをしへ日々に大いに弘まり

三田　或ハ御田及ひ箕多に作ると　古神領に寄せられし地を御田と書る由古老の説なり

和名類聚鈔云　荏原郡御田云云
武蔵國風土記殘篇云　荏原郡御田郷或箕多
公穀三百六十七束　假粟百三十九丸　貢松竹蔵〔〕
等亦有諸禽允大膳或木工寮云云

或人云此地ハ三田家の旧領ゆ〻しく三田氏累世こゝに居住せ三田三河守其子駿河守綱勝武州三田に住せ代〻綱字を名とせ依て後人渡辺の綱と混し交へて誤まる歟と云　渡辺系図に云源次充武蔵國足立郡箕田郷に配せらるゝ　三田箕田同訓なる故に混雑してゆゑ　三田箕田園の　鶯峯文集に箕田園の　旧跡と号せるものあり　此地を渡辺綱の記と号せるもの誤なり　其文ハこゝに略せり　永禄二年小田原北条家の所領役帳に大田新六郎知行の内に三田内壽樂寺分　同箕輪寺屋分　又島津弥七郎知行三田及間多及中村平次左衛門知行三田高福寺分　本住坊寺領に同所　惣領分の地等を配せと見

綱坂　同所　松平隠岐侯と会津家との藩邸の間を寺町へ



下る坂を号く惣鹿子よ渡辺坂とあり菊岡沾涼云此所ハ箕田武蔵守の居城跡なりと又同所有馬家の藩邸北南の坂を綱ゐ引坂と号く綱ゐ産湯水と云ハ同所肥後侯の園中綱ゐ駒繋松と称するハ隠岐侯の藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内にあり

按ゐ窪三田ゐ綱生山當光寺といふる一向派の寺あり渡辺の綱ゐ出生の地なりとゆひ伝ふ又三田八幡宮の神躰も渡辺の綱ゐ守護神なりとして此辺綱ゐ縁あるものの多し會津家の別荘も綱ゐ縁と称するこもあり其墨ゐ云く武蔵國荏原郡渋谷荘箕田邑ハ源綱ゐ陳跡なり

仕と云ふ此所ゐ移る已来數百の星霜を歴とへども其塚存せ塚上ゐ松を栽く遺跡を標せ則是壮氣あるものゐ明暦四戊戌の夏會津源公此の地を賜ひ別荘とし千歳の餘情塚を存せるハ蓋その勇を取り古の士を尚ぶ俄と云くかくの照合ぜくれ〳〵と此地ハ箕田ゐ綱ゐ前の三田の象下ゐ詳なり

小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号く此所を飯倉神明宮の舊地とするハ誤なり

三田
春日明神社

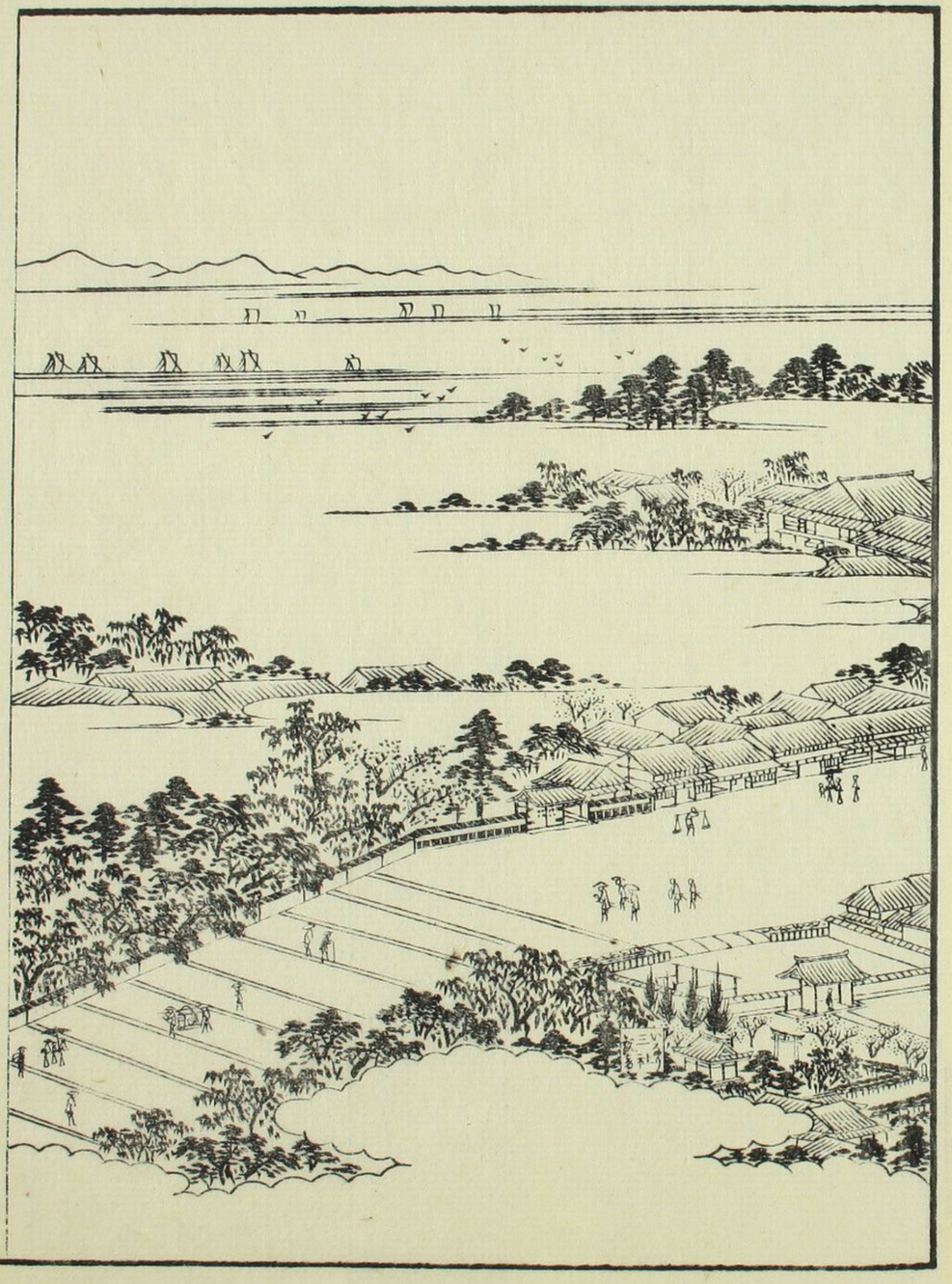
春日明神社　三田一丁目にあり　別當を三笠山神宮寺と号す　和州三笠山春日四所の御神を鎮座なし奉る　三田の産土神ゆゑ例祭ハ毎年九月九日に修行を備へ云當社ハ　村上天皇天德年間武藏國司藤原正房任國の頃藤原氏の宗廟なる加ゆゑ此御神を此地に勸請せむるとなり　其後文明の頃法印慶賢中興を本地佛を十一面觀世音ゆゑ弘法大師の彫造なりとの慶賢瑞夢によりて感得の靈佛なりといふ

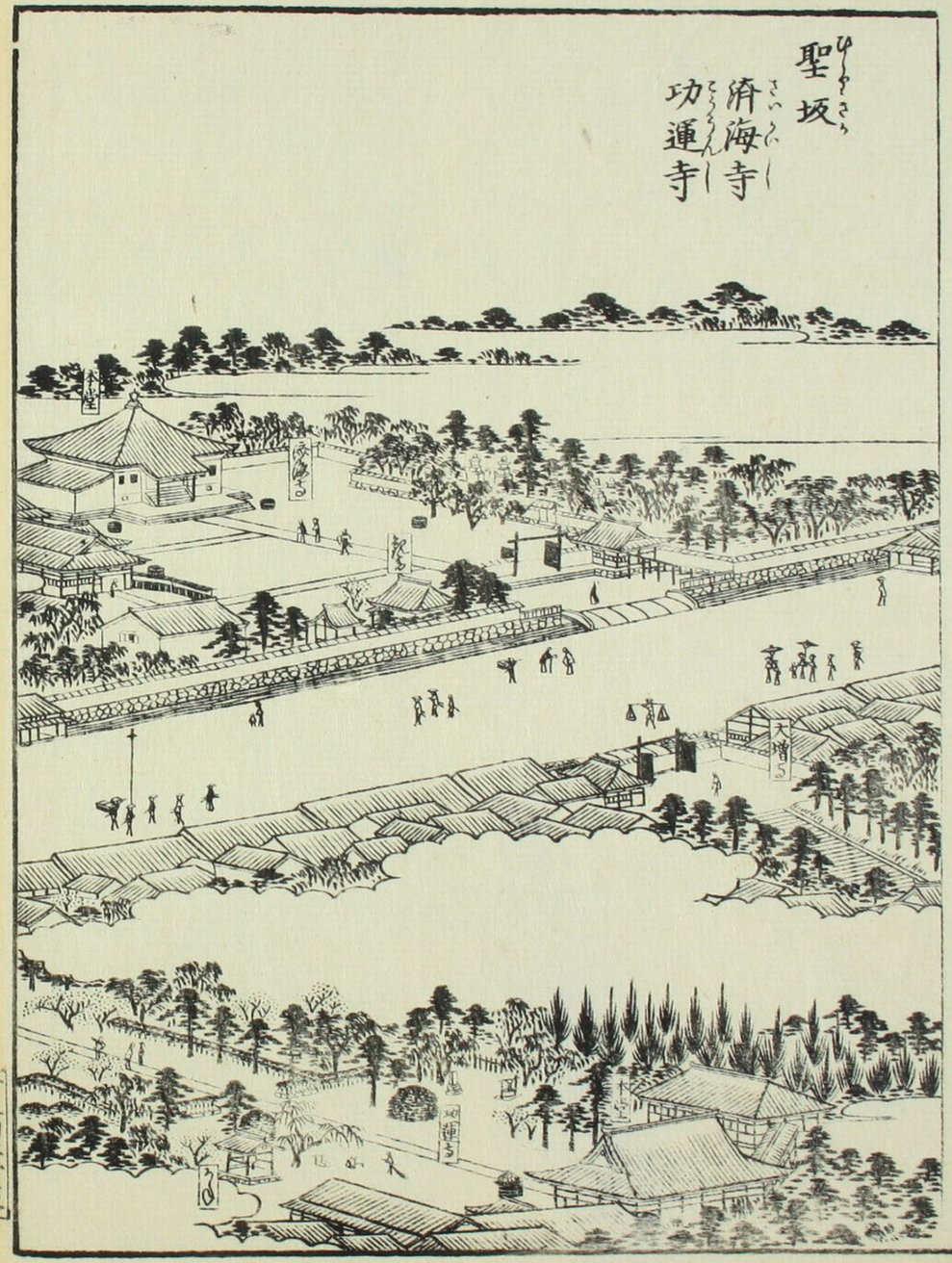
月波樓　同所松平主殿戾別莊の看樓の号なり　此地北眺望實に洞庭の風景を縮るゆゑ岳陽の大觀を摸に似たる依て城南の勝地と羅山先生の東明集に詳し

三田八幡宮　芝田町七丁目にあり　三田の惣鎮守ゆゑ祭禮山城男山八幡宮と同くして後一条帝寛仁年間草創

三田八幡宮

海辺




聖坂
済海寺
功運寺

もとめひ傳ふ旧地ハ窪三田ニあり（土人云當社ハ延喜式の神名記及ひ武蔵風土記等の載る所の葛田神社是なり今も其旧地ニ一社あり窪三田八幡宮と称す）正保年間今の地へ移し奉るといへり

此地後ハ山林ゆゑ前ハ東海ニ臨む加ふ風光秀美なり

別當ハ天台宗ゆゑ眺海山無量院と号し祭禮ハ隔年八月十五日ニ修行を放生會なり

延喜式神名帳云　武蔵國荏原郡御田郷

葛田八幡

武蔵國風土記殘篇云　荏原郡御田郷葛田八幡

圭田五十八東三字田

所祭應神天皇也武内宿祢荒木田襲津彦等也和銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺　同所聖坂ニあり（聖坂とハむかし此地ニ高野聖多く住く開きし坂なれハかく云とそ）

曹洞派の禪窟ゆゑ三州龍門寺ニ属を閑山を默室天周和尚とのふ支院三ヶ寺あり當寺ハ定會地ふしく所化寮あり當寺境内ニ綱塚と称するものあり（綱塚ハ前の三田及ひ細坂の条下ニ詳なり）

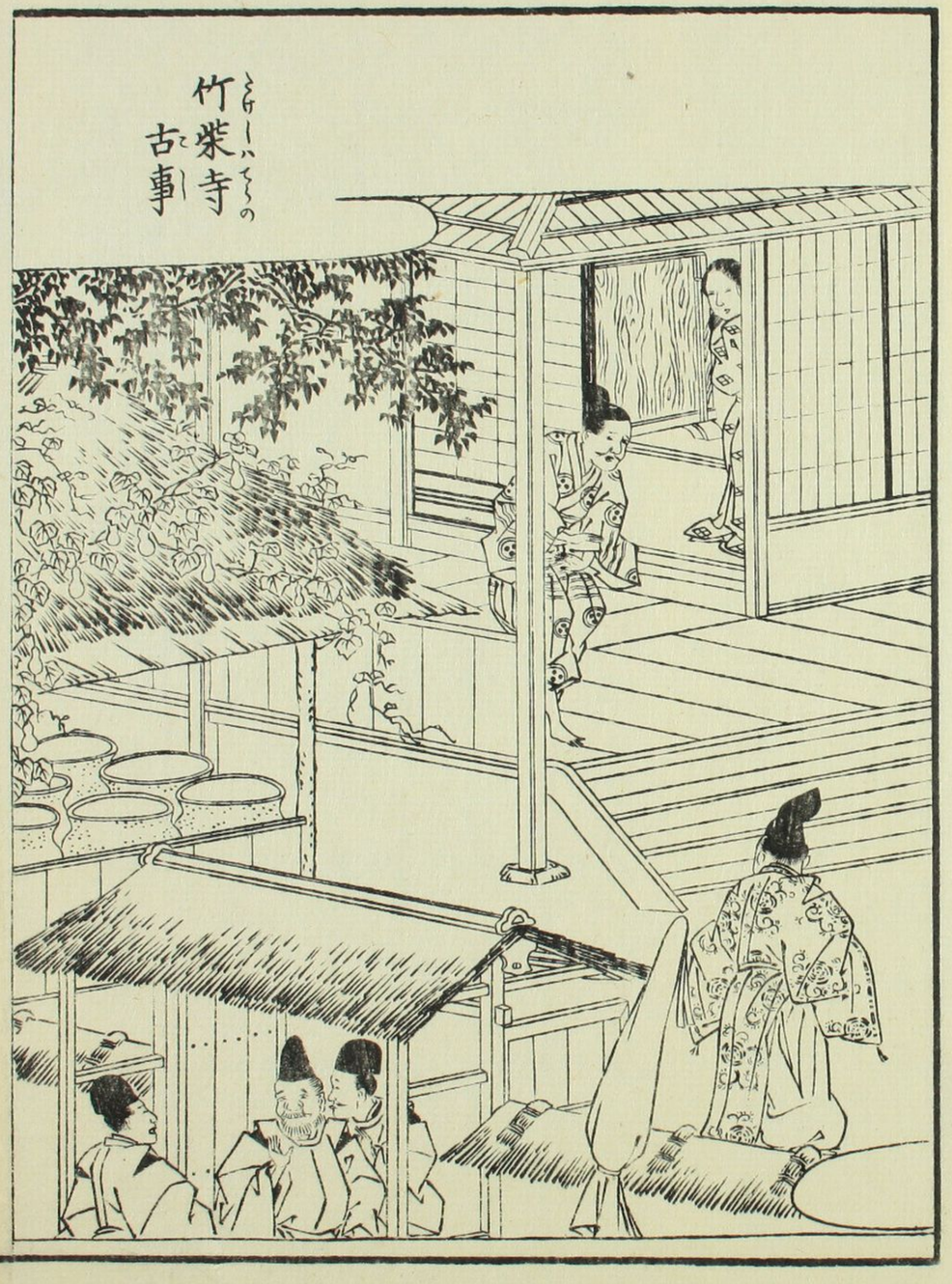
周光山濟海寺　聖坂の上道ニ左側ニひかる浄土宗にして京師智恩院ニ属を上古ハ竹柴寺と号して巍々たる真言の古刹なりしを中古荒廢ニ逮ぶ依て法誉上人念無和尚中興を（その庭海岸ニ臨む沖より目當の燈籠あり）當寺庭中の眺望ハ實ニ絶景なり房總の群山眼下ニあり

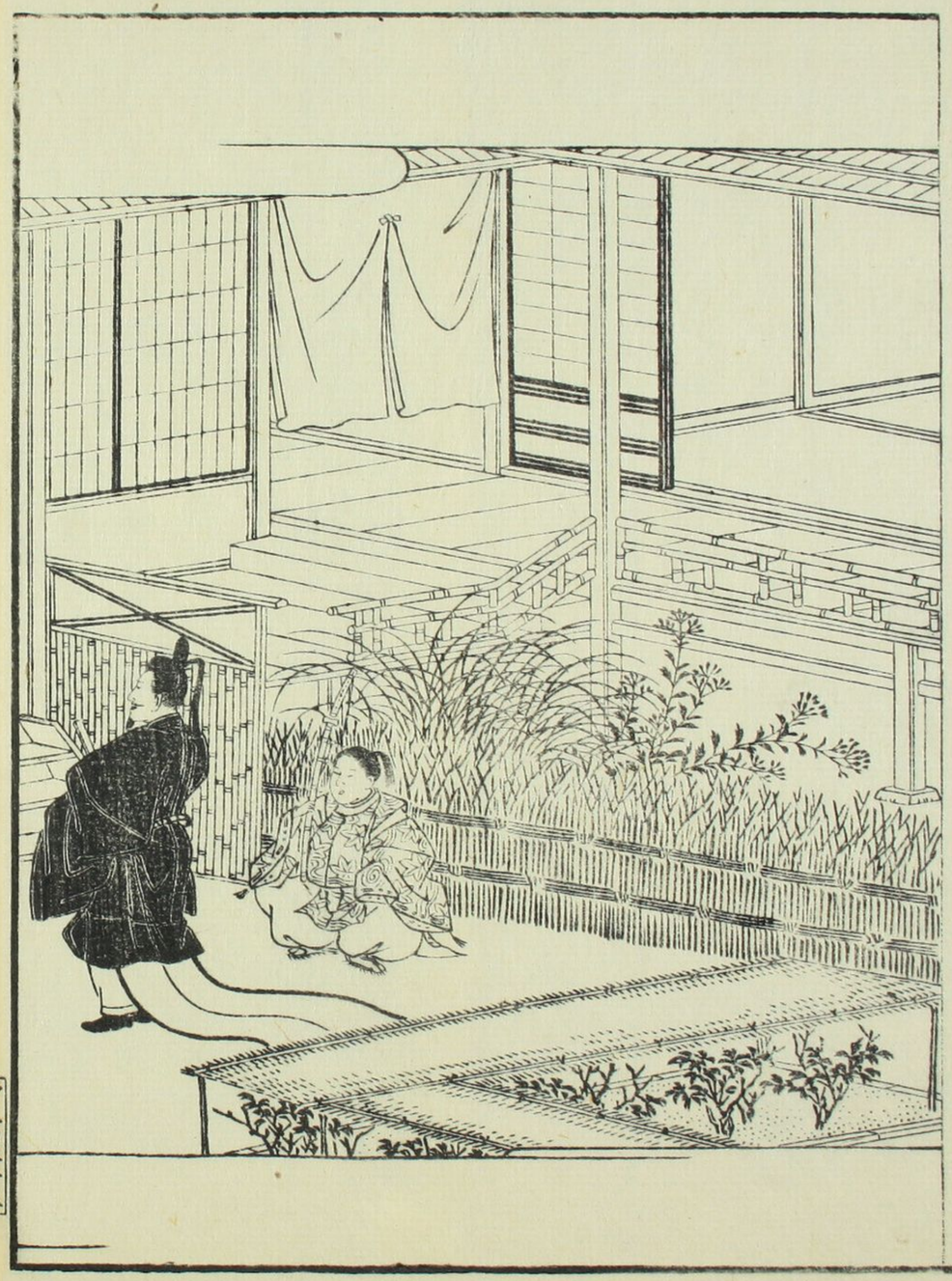
く雅趣もとかるし朝夕ニ漂ふ釣舟ハ沖ニ小く暮て數點の漁火波を焼て疑ふる羣芳發して緑陰深く風露爽ふしく氷霜潔し四時ニ觀をあらくあく風人の眼を疑しむる一勝地なり月の岬とのふも此辺の惣名なり

竹柴寺舊址　濟海寺と同隣の土岐侯の邸ニ地其舊跡ありといひ傳ふ（小岡明河云按ニ今の地ハ海辺ニ近く高の上ニ在ハ更級日記ニよりて知ルへしと云ふ若しかく此寺ハ昔ハ外ニありしを後ニこの所ニうつせしなるへし更級日記云今ハ武蔵國ニなりぬ殊ニをもしきものとて清なる砂ま

白く波もなくこひちの様みく紫生と聞野も蘆荻のを
高く生て馬ふ乗く弓ちる末見えぬと高く生茂りて
中を分行よ竹柴といふ寺あと遥よいさろうやいふ
所より樓の跡礎なとあるいうなる所そと問ハ是をいふ
竹柴といふさうなり國の人よりありるを火焚家乃火
焚衛士よさ〜奉りたるるに御前の庭を掃とく
あやうや苦しきあをみるる鮮我國ふ七川三つ造り
居る酒壺ふ〜渡〜ふ〜えの瓢の南風吹ハ
北よ靡き北風吹ハ南よなひき西吹ハ東よ靡き東
吹ハ西よあひくを見くかくくあるとと獨こちつふあを
ふを其時の帝より御むを見いみ〜うかし〜ふ〜
そをふ只獨り御簾の際よ立出ひく柱ふ寄かく
ア〜く御覽をるふこをものこかく獨こり伏いを

哀よいうなる瓢のいふ靡なんといみ〜う床〜く
おほされくまふ御簾を押明くあのをものこあちうんと
めくれいかこまりく高欄のつふ叅りたるまふ
云つる事今えとかくを我ふいひく聞せと仰られれハ
酒壺の夏今えとうり申れハ我ぬくいきて見せよ
さいふゆうありと仰られまハかこく恐〜ゆ思ひ
くれとさるへきふやなのをんおひあてまつりく下るふ
便なく人追來らんと思ひく其夜勢多の橋よりと
よ此宮を居さてまつりて瀬田の橋をひくまをうを
こほちく夫を飛越く此宮伏かきおひ奉りて七日
七夜といふ武藏國よいきりきまをり帝后御子
うせをひねとおほ〜まをひをあをふよむさ〜より
國の衛士のをのこなんいをかうを〜きりのを首ふ


竹柴寺
古事



引うけく飛様ニ逃ること申出く此をのこを尋るふなるを
くも論なく本の國ふこ行らあと公ふも使下りて追ふふ
勢田の橋こ沒まく得行ゆす三月といふまむ
國ふのきつきて此をのこ捜尋るふ此御子公使をめ
我さるべきみやありくん此男の家ゆうくてぬく行と
いひくふぬく來ていくくてあうく覺ゆこの男罪
きうせくんハ我をいうてあれと是も前世ニ此國ニ
跡をきるべききくせとありくあもや歸く公うり此
くを奏せくと仰らまくんハいくんくるくてのわりく
御門ニかくなんありつると奏くくんハ云うひゐく其男
を罪くても今ハ此宮をとくてのへく都ニかへく奉る
るきくふをあくす竹柴のちのこまいけらん世の限を
むさくの國を預くせく公事もなきせくたく宮ニ

其國あつけ奉らせ賜ふくも宣旨下るくんハ此家ハ
内裡のごとく造りく住せまてまつりる家を宮なと
うせなひふくんハ寺ふなくるを竹柴寺ふ
なるくこ

亀塚

濟海寺の北ニ隣く隱岐家の別莊の地ニあり
昔ハ竹柴寺の境内なりく(市閑國の頃地を割く隱岐家の別莊
ふつるふ此時亀塚ハ隱岐家の内ニ入つくく其家の
建られる亀塚の相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地ニ酒壺
碑と称まるものあり其まの
其くくふ一つの靈亀栖く後土人崇めく神ニ祀まつ
いつの頃ニあるくん或時夜くくく風雨あり其翌日
彼酒壺一堆の石ニ化せりと云又文明中大田道灌此地ふ
斥候を置其亀の靈あるを河圖と号濟
といへくく(濟海寺の山号を青ハ亀塚山と唱へしく今ハ土人ハ亀塚の濟海寺と唱へくく)
祖徠先生墓　三田寺町長松寺といる淨家の境内ニあく

魚藍観音堂

碑文ハ猗蘭侯撰ス

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道鄒魯博究物理立言疹辭德崇名卑不朽莫大焉嗚呼先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朦焉嗚呼實出先生天意可知也其爲人其行狀弟子茂卿以字行銘曰洋洋聖謨世用惑久天降文運斯人識矣享保戊申正月十九日六十有三卒姓物部茂云受乃化乃弘微猷維厚大業已成日新冨有聚其不壽天棄斯人匪天維棄有司列辰嘻我小信眼能享神盛德不朽永于牖民

先生ハ萩生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字ヲ通称ハ惣右衛門と云父ハ方庵と号し宮医ニ行る一号ヲ護園住ヲ五歳ヨリ文字ヲ識十五歳ニ文ヲ属ス家極ク貧しく東都ニ出ク力学し業成ク柳澤侯の挙ニ遇ひ食禄五百石ヲ賜フ徧徠惣裁と享保十三年戊申正月十九日ニ卒ス著述の書八十餘部とす

魚籃觀音堂　同所淨閑寺ニ

中ニ六寸計ある面相唐女の御姿ニ右の御手ニ魚籃を持し左の御手ハ天衣を持し給へり

縁起曰唐元和年間憲宗の年号金沙灘といへる地ニ一人の美婦の籃を持し魚を鬻くあるを見る人其容貌の麗しきを競ふ

女の云く我性佛経を悦ふ若吏ニ通せむ人あらハ夫とせんと云其中ニ馬氏なる人あるを是を依此女をもへるに程なく死せる馬氏悲ニ堪ヘを日を経る後異僧来り馬氏と共ニ塚をこるニ霊骨こもく金鎖ヤなりく光を放つ是より其國こもく三寶を崇ムる

初金沙灘ニ應化し妙相を魚籃観音とハ号けたてまつる

爰ニ當寺ニ開山称誉上人自の師法誉上人肥州長崎ニ遊化の頃一老婦より此霊像を感得し元和三年丁巳豊前國中津といふ地ニ假ニ淨舎を営み御座を構へく魚籃院と号ス竟ニ寛永七年庚午三田の地ニ奉安せしを称誉上人其地の所せまを歎き義應元年壬辰正ニ今の地ニ移し當寺を建立す尓より猫素まものく渇仰し衆人打群く歩を運ふこ

霊應いちじるし香煙常ニ風ニ靡き梵唄うたふ林う

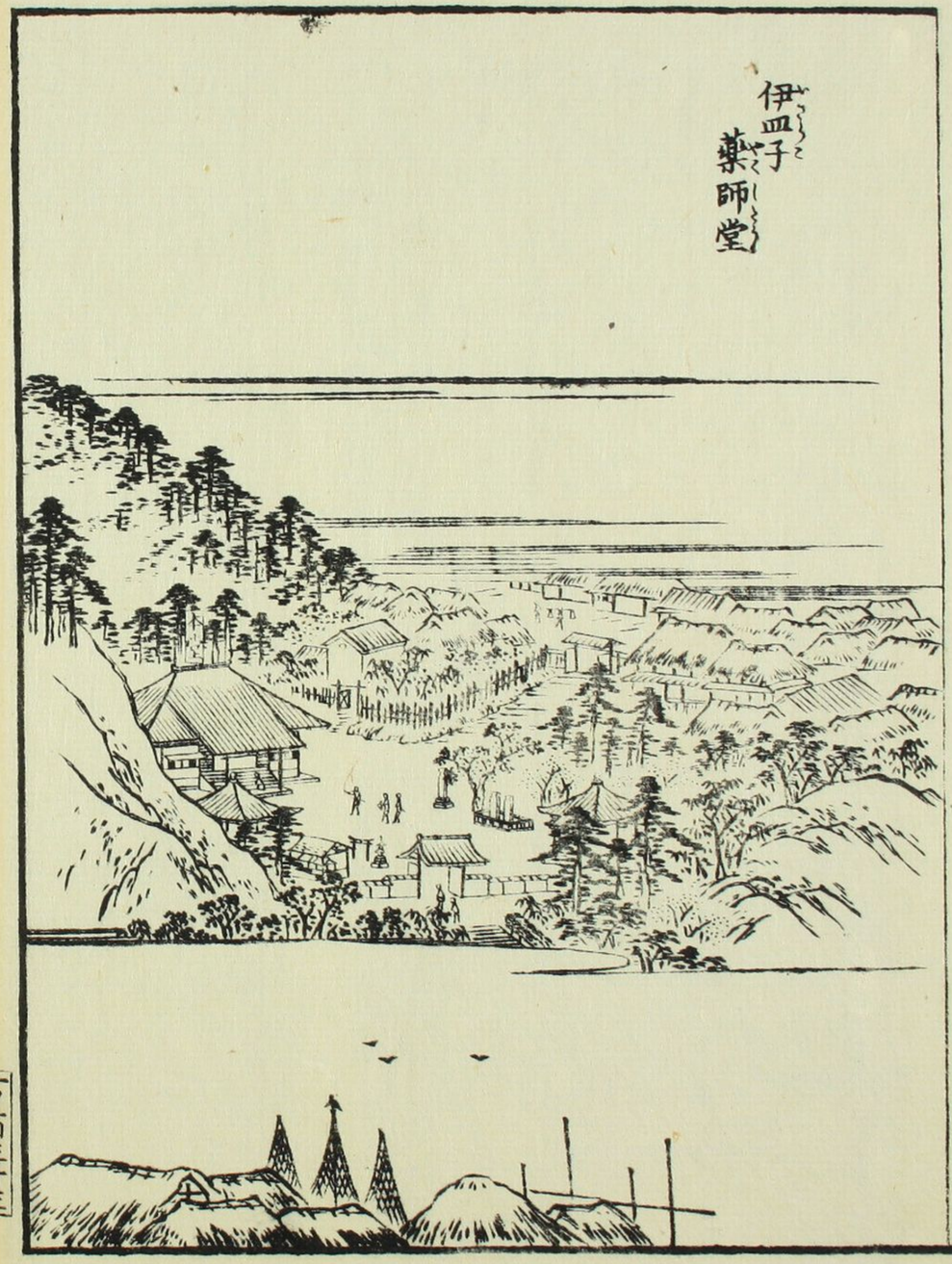
潮見坂　聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼ぶ古ハ此辺より七崎あり合せて七崎と云按ふ潮見崎月岬袖ヶ崎大崎荒蘭崎千代ヶ崎長南ヶ崎是等を

伊皿子藥師堂　潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり寺を醫王山福昌寺と号す天台宗城琳寺に属す本尊藥師佛の像ハ智證大師の作にして右大將頼朝卿の念持佛なりしと云往古相州鎌倉の佐介谷にあり藥師堂と云其のち騒乱の時住僧護持して當國品川の地に移し今の御殿山の地なり終に寛永年間今の地に安置せりと字藥師堂跡と其旧跡なり

東鑑曰

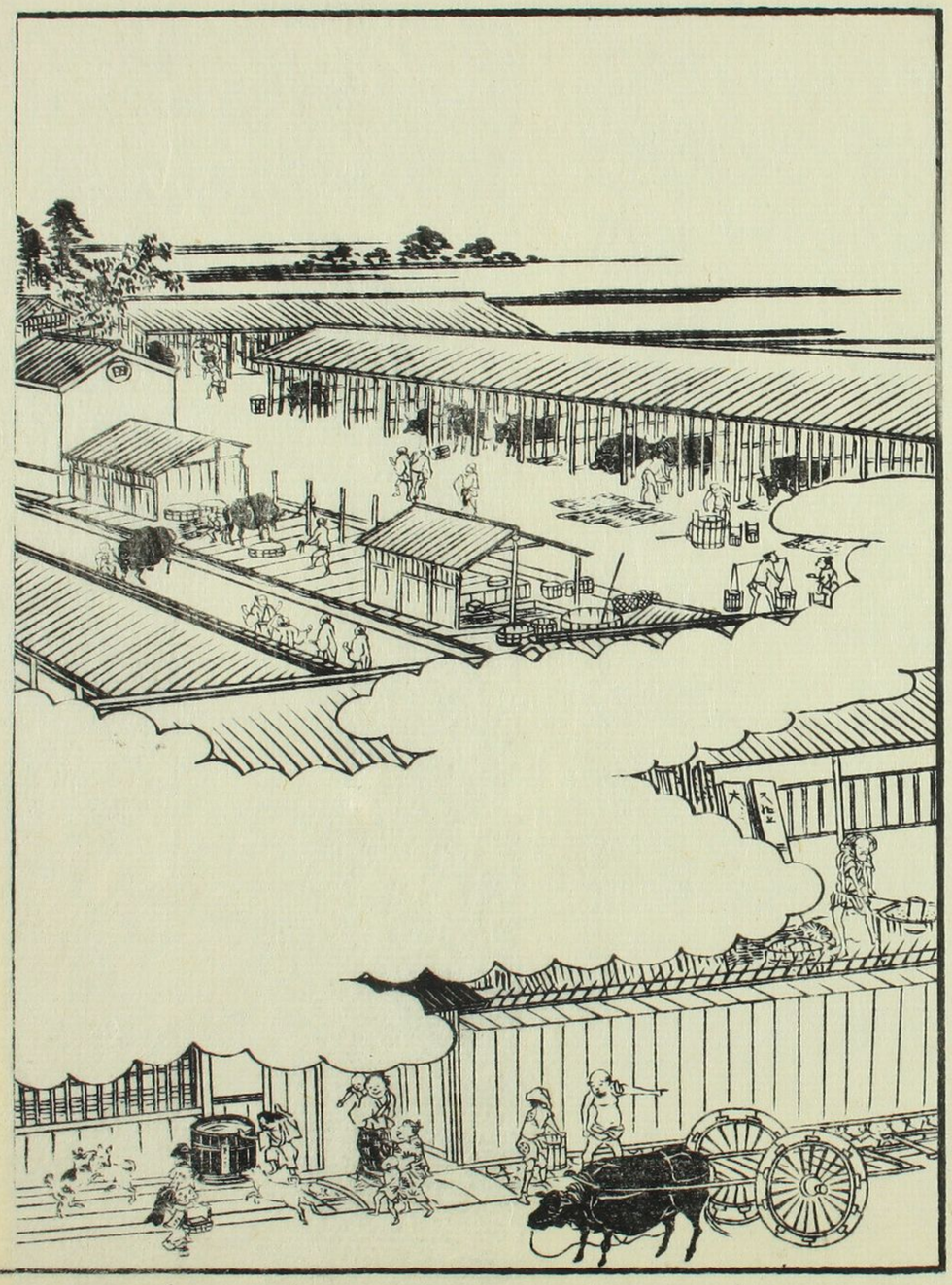
建保六年戊寅十二月二日庚子右京兆依靈夢所令草創給之大倉新御堂安置藥師如來像実慶奉造之今日被遂供養導師莊嚴房律師行勇呪願圓如房阿闍梨通曜堂遊頭覺房良喜供僧也施主並室家等坐簾中

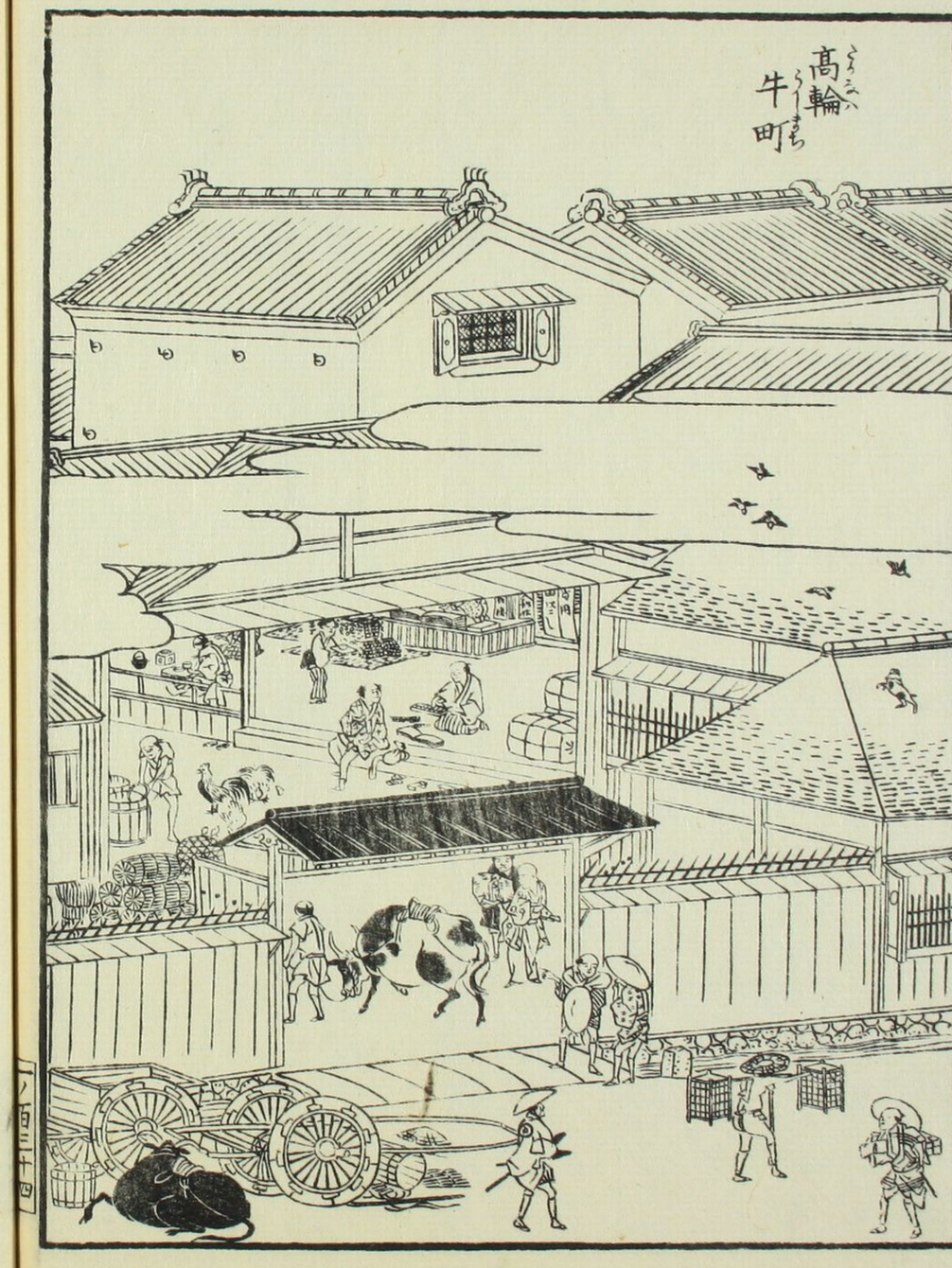
按ふ東鑑に此藥師佛を運慶の作とし寺傳智證大師とも又東鑑に右京兆とあるハ北条右京太夫義時のなるべし

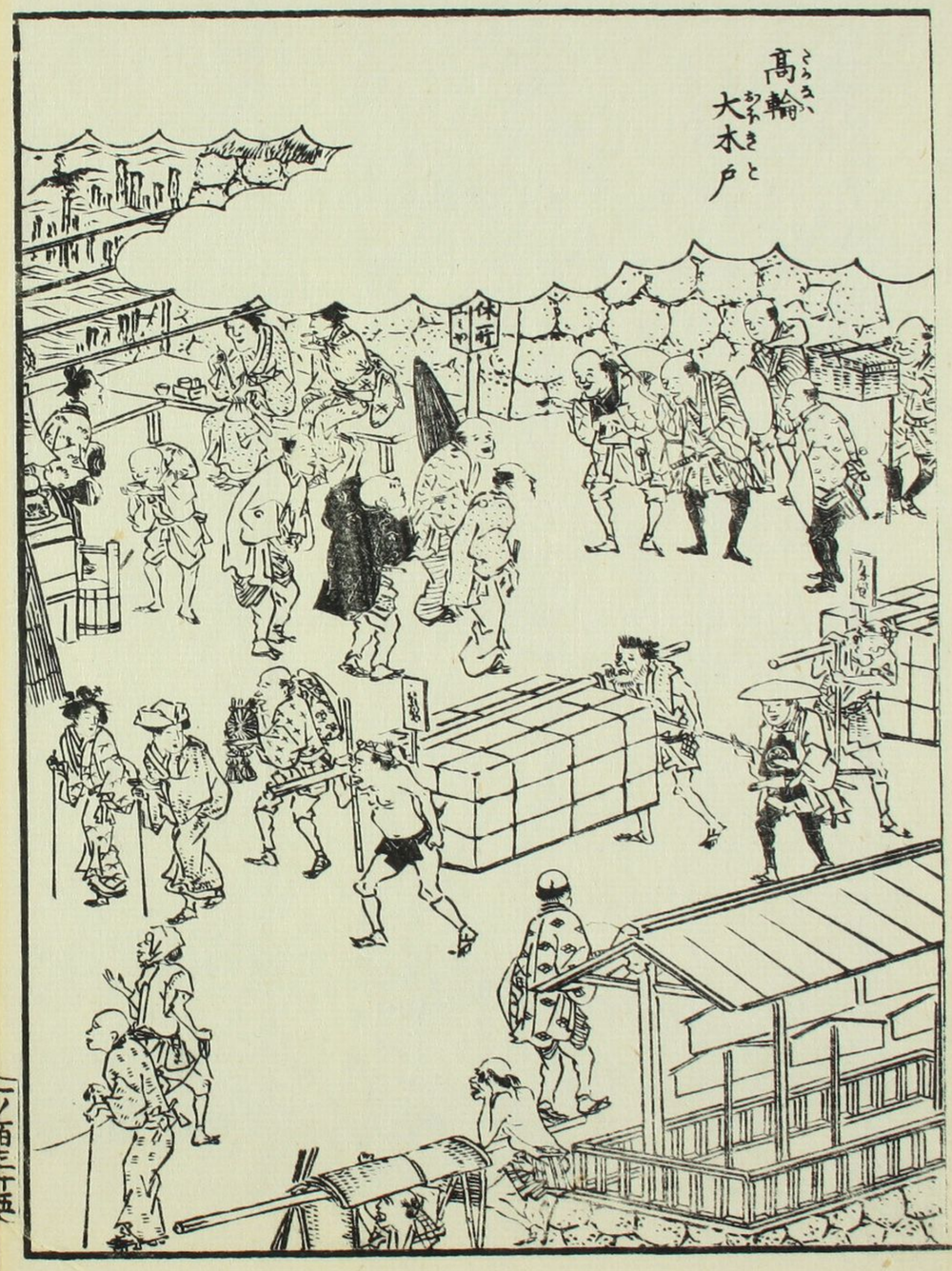


牛小屋　牛町より延宝江戸図に此地を牛の尻と云とあり牛を畜せる家多く牛の數一千疋より餘り養ふ処の牛額小く其角後より靡きこゝを藪覆と号けく上品なりと都く牛ハ行事正しく殊より早し形婉より精氣撓す力量勝たるふ軛をかゝ重を乗せく遠きに運ふ人の用を助るゝ其功誠より少くして古ハ淀鳥羽よりあるく都の外ゆく牛車なるもふ所入國の頃より許有りて江府ゆと是を用ゆるもとなるも餘ハ駿河よりあるのゝゆく唯此三ヶ所より限りとゝ

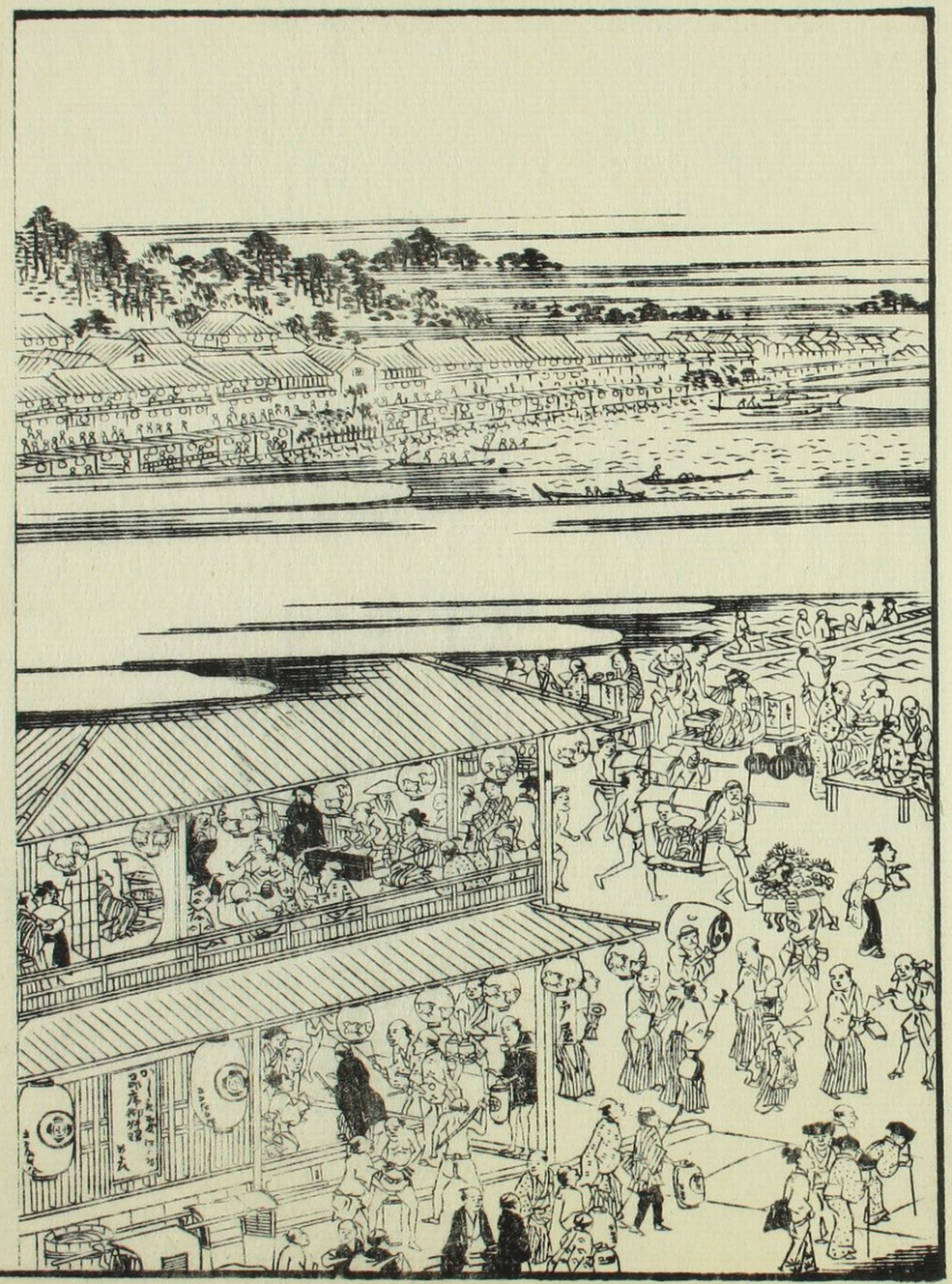
高輪大木戸　宝永七年庚寅新より海道の左右より石垣を築せらゝ高札場となるゝ其初ハ同所田町四丁目の三ヶ所より江戸の喉口なれバ有り田町より品川近の海岸彼地を元札の辻と唱ふ今ハ此地を肆海亭をまうけられハ京登りと東下り伊勢参宮等の旅七軒と云辺ハ酒旗肉人を餞を迎るとく来ぬる輩こゝより宴を催し常より繁

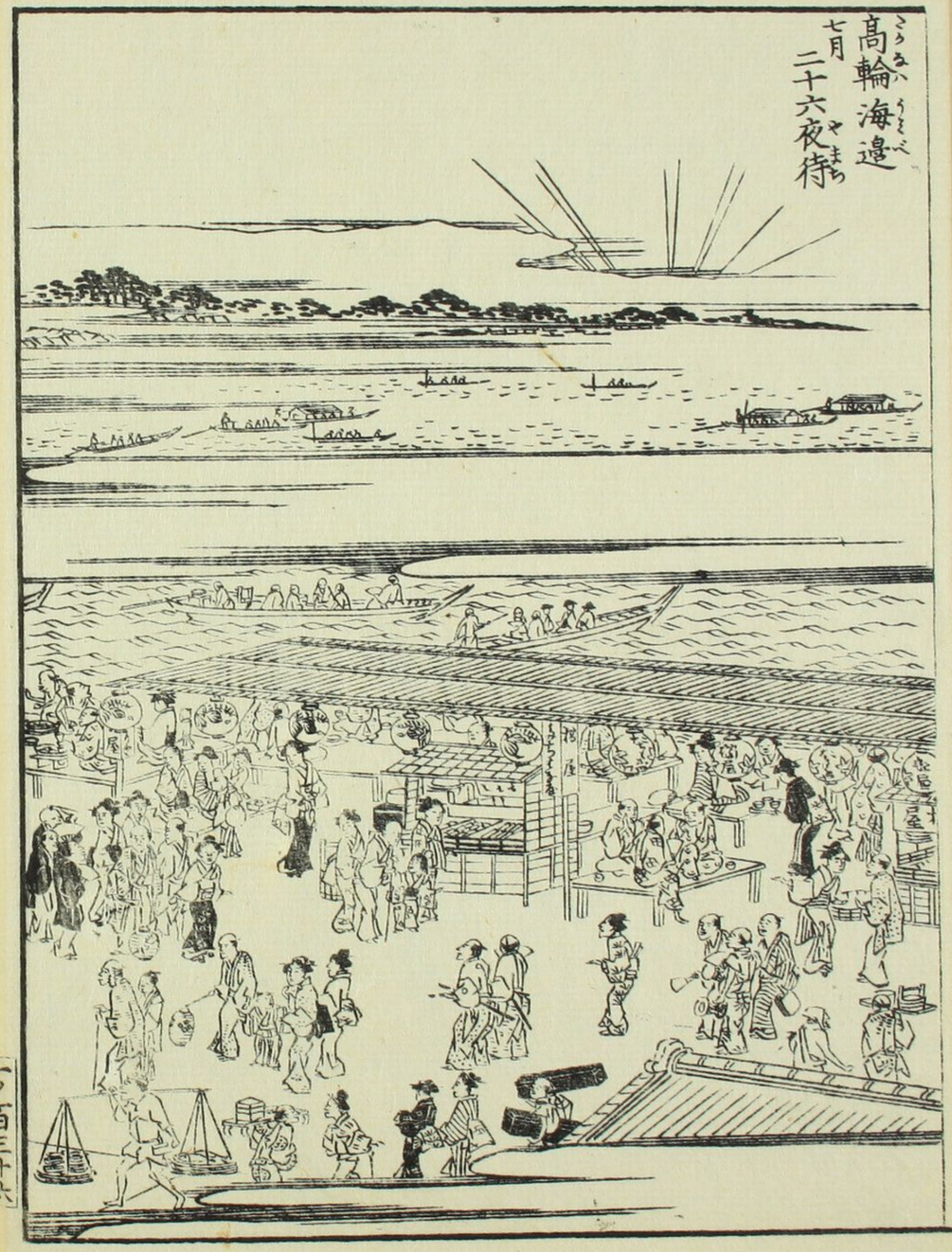



高輪
牛町


高輪と大木戸
休所

緑海蹤郊関高阡
上路間早朝平吐
日殘霧半含山遠
近征帆出東西驛
馬班長安從此去
萬里幾人還
南郭




高輪海邊
七月二十六夜待

昌の地に後世三田の丘綿々と前ゆく品川の海遥か開け渚よ寄る浦浪の真砂を洗ふ光景実に感興あり

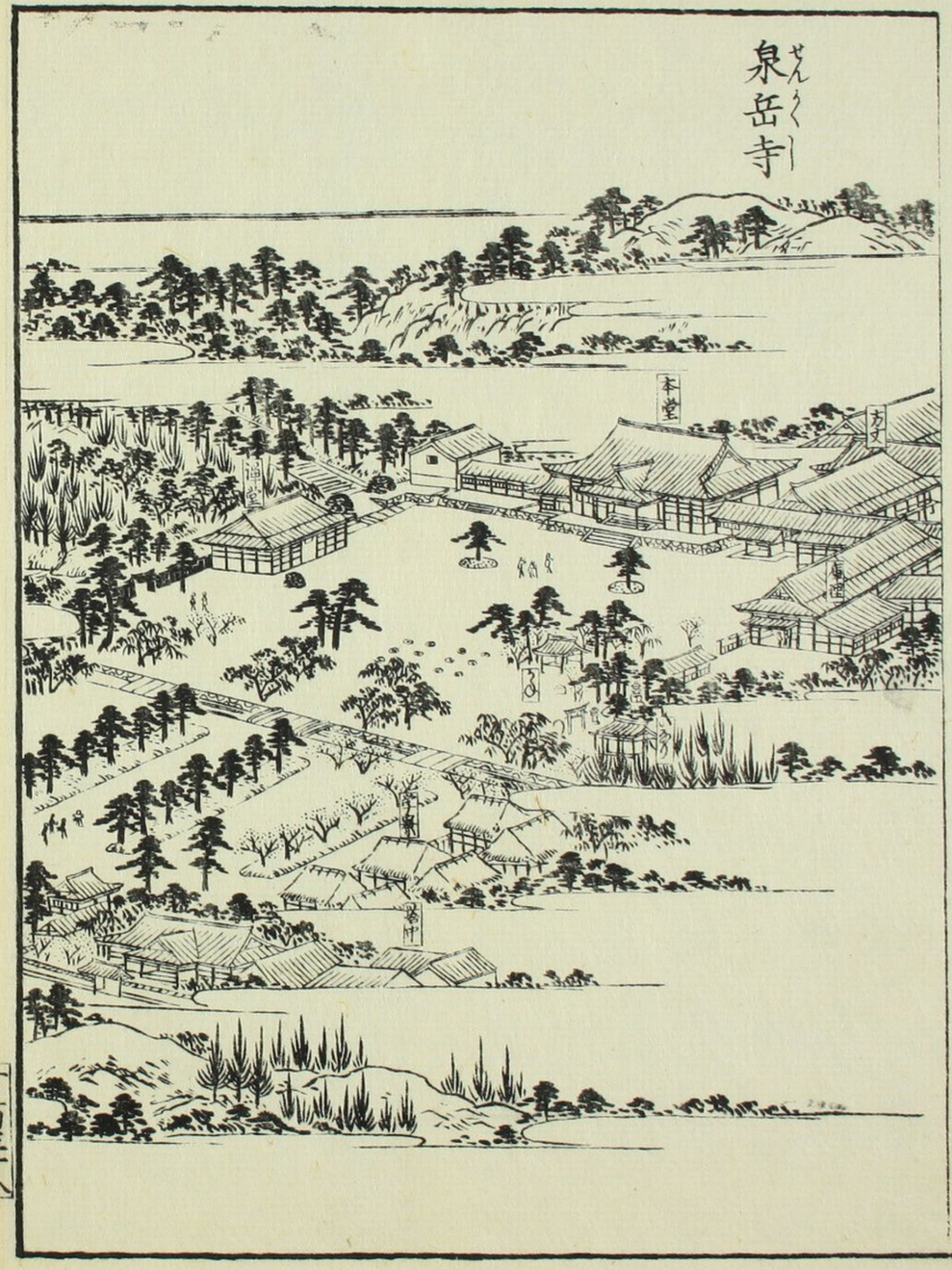
高輪ゥ原　里老云く白金臺及び二本榎品川臺大井村抔ふ辺り迄の惣称なりと異本北條五代記上杉修理太夫朝興武州江戸の城に居住し大永四年正月十三日小田原北条家より二万餘騎を引卒し朝興を攻んとす彼地を發向し依て稲毛六郷の上杉の家人より早馬をもって急を告る朝興ハ俄の事なれば軍評定も及ばず中途より出迎ひて勝負を決せんと欲し小田原の先陣と品川高輪ゥ原にて渡合とあり（小田原記に永禄信玄小田原を攻と雖も海条下ハ一手ハ江戸品川の縄嶋の辺を焼く民屋を追捕し捜す今の海道ハ後世に開けしもの又江戸吐ハ高縄手ハ縄手とあり然る時ハ高縄ハ高縄手なり古へハ丘の上通りを通路せしなれハ）

萬松山泉岳寺　海道の右にあり野州富田の大中寺に属し曹洞宗江戸三箇寺の一員なり

橋場總泉寺芝青松寺當寺ホモ

坊舎三宇学寮九宇あり当寺ハ往古慶長年間台命を奉し門庵宗旨和尚外櫻田の地に創建せる所なり禪刹なれども後寛永十八年辛巳再命あり寺を今の地に移し本尊釋迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文殊普賢なり總門の額萬松山の三大字ハ華僧閩沙門道霈の書なり康熙辛酉孟冬上浣と記せり

当寺ハ浅野家の香花院なり又浅野内匠頭長矩及び義士四十七人の石塔あり方丈の南の丘に半腹にあり傍に当寺住僧建る所の石碑あり其旨趣を注せ二月三月の四日及び正月七月の十八日等ハ英名を追慕し集る人少からず又当寺に義士等の遺物を収蔵せるもの多し


泉岳寺
本堂
方丈
鐘楼
庫裏

浅野家の義士をいとむ
其角
平土蔵
学寮
学寮
中門

元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英を双傷ふ及ぶ長矩ハ死とす後其家の長臣大石内蔵助良雄本國播州赤穂ハ在く君の讐ハ共ふ天を戴へ〻〻と云の義ふ血盟を以て同志の者を〻〻らひ終ハ元禄十五年十二月十四日讐家ハ至て義士四十七人義英の所在を捜し〻く其首級を得当寺ハ至て亡君の墓前ハ祭るの後誅を待く翌十六年二月四日自殺せ〻〻ハ諸書ふ詳なるを以て〻〻を省く

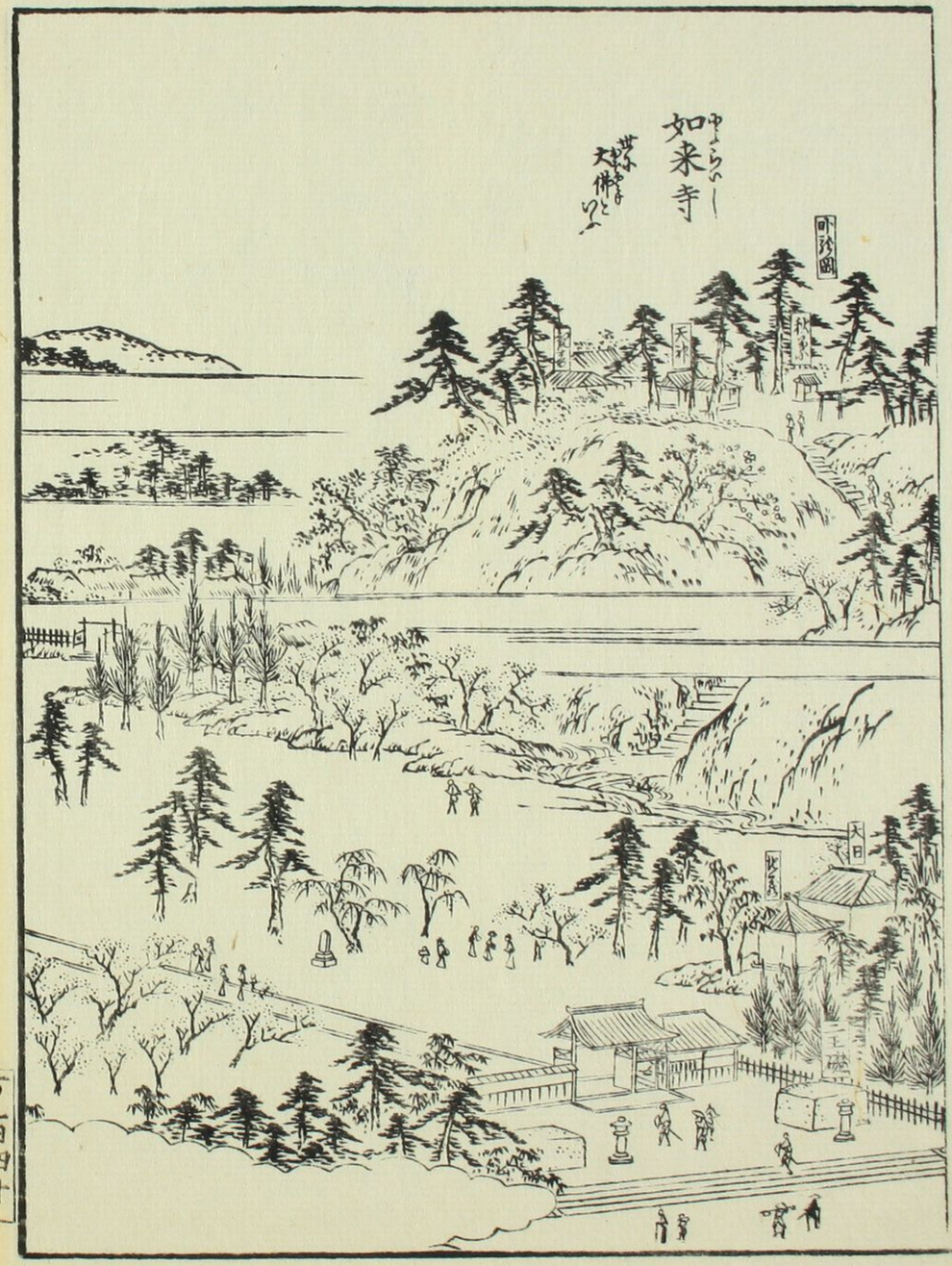
歸命山如来寺　大日院と號を泉岳寺の南ハ隣る天台宗わ〻く東叡山ハ属せ本尊五智如来ハ座像各一丈あて（拾ハ芝の大佛と称す）木食但唱師の彫造なり（但唱ハ佛工中〻と奇妙と号せり）佛躰を作ハ妙を得り故ふ（京都鳥滝の五智山ハ安置せ五智如来十三佛等ハ但唱の作）并ハ自の像を作る所の石像の但唱多く摂州有馬郡高須村の産なり（彼所ハ靈亀山與勝寺と云古刹あり）再與〻〻ハ釋迦如来及ひ自の像を彫刻し安置せ三歳わ〻く魚肉を食せを九歳初て出家す年十五ハ至て木食但善の弟子とな〻て夫ハ後信州檀特山ハ籠り百日の中ハ念佛三昧を修得し向の峯ハ三尊の影向を拝を同國浅間嶽及ひ南紀の那智山等ハ籠るて各百日宛又南海北溟の間を普く回て諸の奇特とを〻て多し終ハ江戸ハ下て寛永十二年當寺を開創し五智如来の像を作るとの〻（三時念佛の勤ハ但唱二代絶）

臥龍岡　境内堂前北の岡を云形状を以号とを上ハ天満宮の祠ある所ふ天神山と称へて

太子堂　同所旭曜山常照寺とのへる天台宗の寺ハ聖徳太子の像ハ十六歳の〻容わ〻く自作て〻〻〻〻〻〻

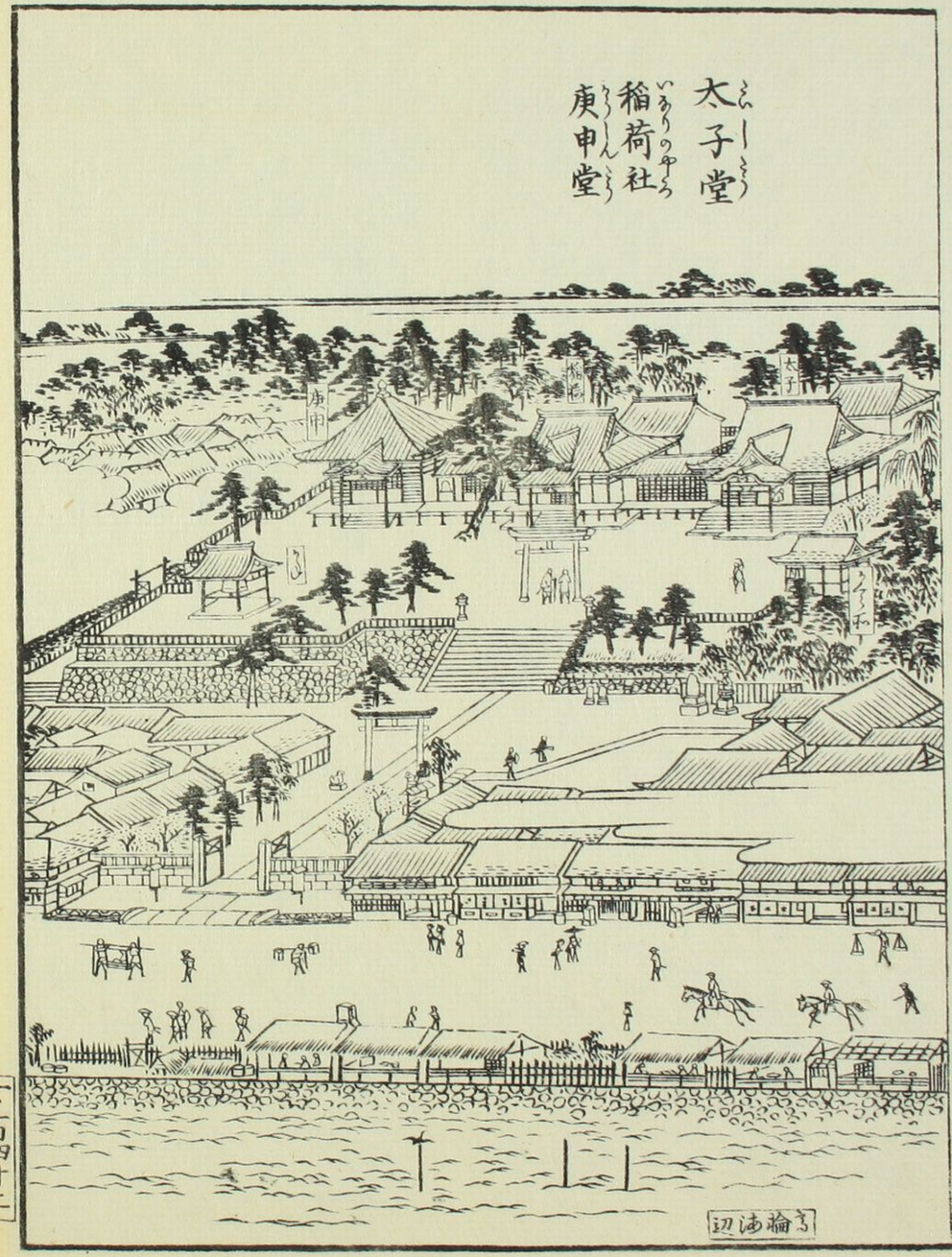
（元禄辛酉岡板の江戸鹿子と云ふ明暦年間越後守光長卿の陪臣川木八兵衛某誌あり此所ハ安置し〻〻と）

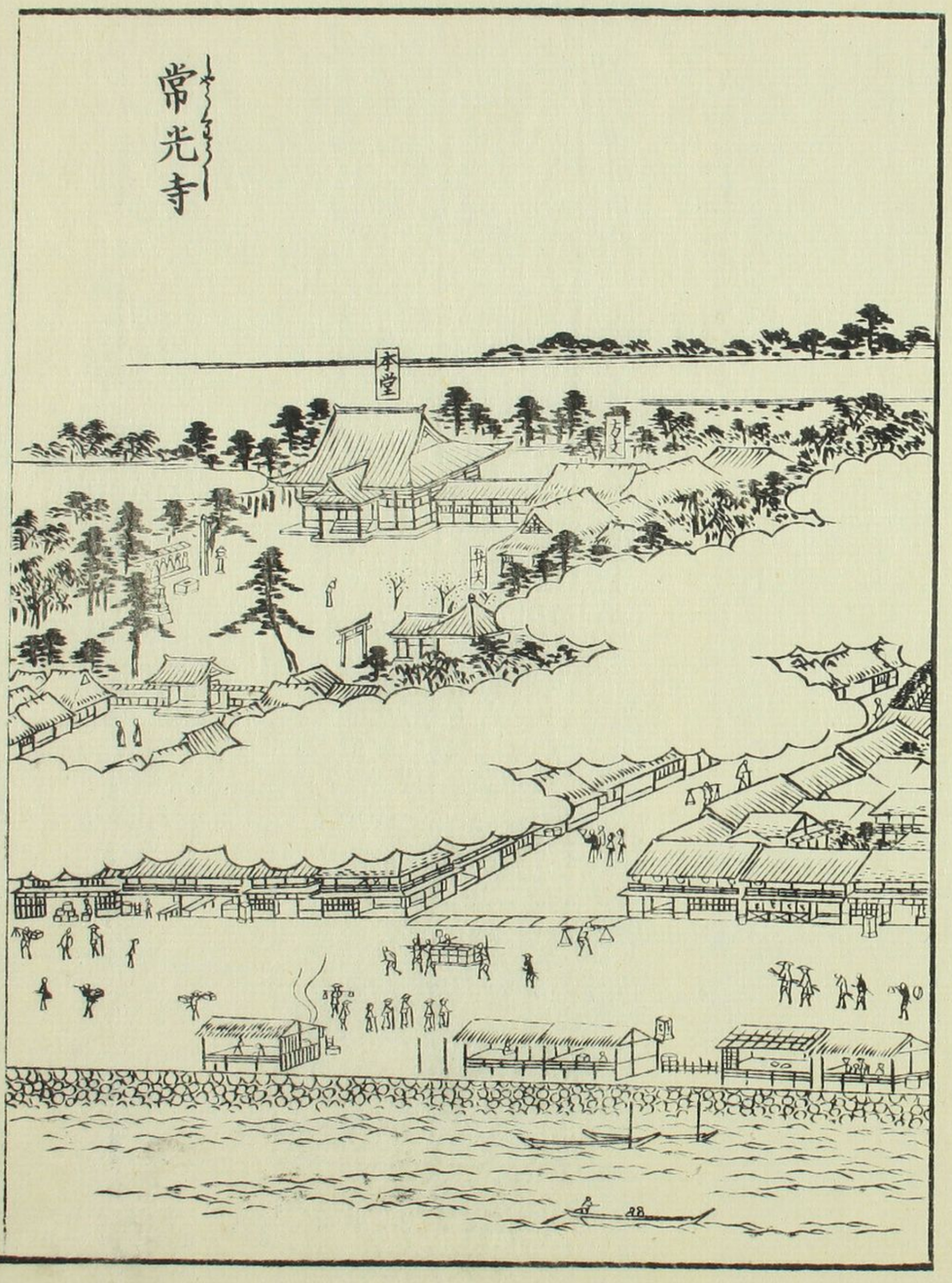
本堂
方丈


如来寺
大仏
明珍園
天神
大日

稲荷祠　太子堂　庚申堂の中に並ひ立せる高輪北
産土神なり
庚申堂　同し境内にあるも本尊青面金剛の木像なり　摂州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作といふ　縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日ハ一年の間六度ありて八専
の間日中より人間に三尸といふ三の悪蟲ありて災を
招く然に庚申を祭る時ハ此蟲退散し身に幸を来らしめ
若不信の輩ある時ハ命根を吸悪業を天帝に訴へ今帝
釋天王衆生をあはれみ給ふ故に汝に此法を附属す我ハ
則青面金剛なり也又十二の誓願を示しのへり僧都信
心肝に命じ直に感見しなる所の尊容を彫刻し普く
衆生に庚申の法を授くとあり
光照山常光寺　同所北町にあるも浄土宗にて芝増上寺に

属す開山を大誉上人と号ス本尊ハ金像の阿弥陀如来
なり（世に信州善光寺分身の弥陀如来と称す）縁起云此霊像ハ聖徳太子難波
の堀江の水面ゆゝしく光容を拜しまひその像を鑄さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人
岡部六弥太忠澄摂州蘆屋の里に陣しける時或翁
此像を忠澄に受与す忠澄大に歓喜し鎧櫃に収め
出陣を然に霊威のあらゝ危難を除き剰へ忠度を
討く武名を顕せり依代く其家に伝へしを獨夜と云僧
故ありて増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ
遂に定月和尚件の旨趣を自記しまひ本尊と共に
當寺に収られしを此故ゆ當寺境内に岡部六弥太
墓と呼ふ古き石塔の破壊せるを存せり
珠玉山宝蔵寺　同所にあるも浄土宗にて芝増上寺に属も


太子堂
稲荷社
庚申堂
庚申
稲荷
太子
高輪海辺


常光寺
本堂
太子

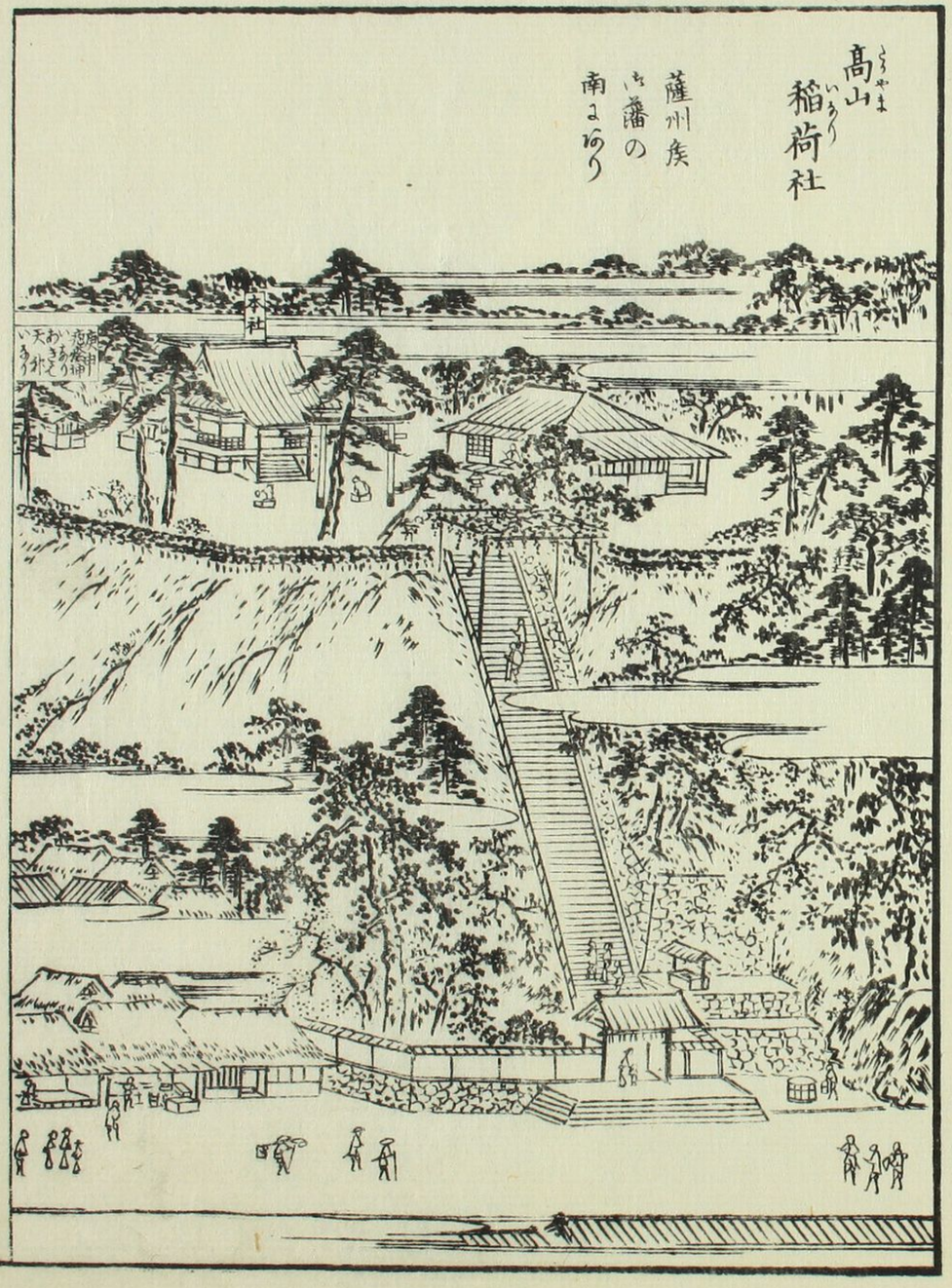
開山ハ順清法印と号し往古ハ慈覚大師開創の梵利
なりしを天台宗なりしとぞ其の頃より今の宗風に轉
して七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興を本尊阿弥陀
如来の像ハ善導大師の作なり御ゑに宝珠を持しめ
故に世俗宝珠阿弥陀如来と称せ
ばなり
本尊の背面に永隆元年十一月十七日彫刻と鐫
子安観世音 當寺に安置せ画像なり
延喜帝の震筆
なりと云縁起一巻あり
画縁起ハ土佐光信と云略縁起ハ和田義盛撰
縁起略に云建久元年十一月右大将頼朝卿上洛せ其
途中一人の婦あり告て云く此霊像ハ梁武帝未皇
太子まし時常に観音を祈念しまつる或時此
霊像を感得なしまつる程なく太子降誕
せり昭明太子是なり其後此霊像本朝に渡ふ

石神社

縁遠き婦人
当社に詣
良縁を祈
れハ必験あり

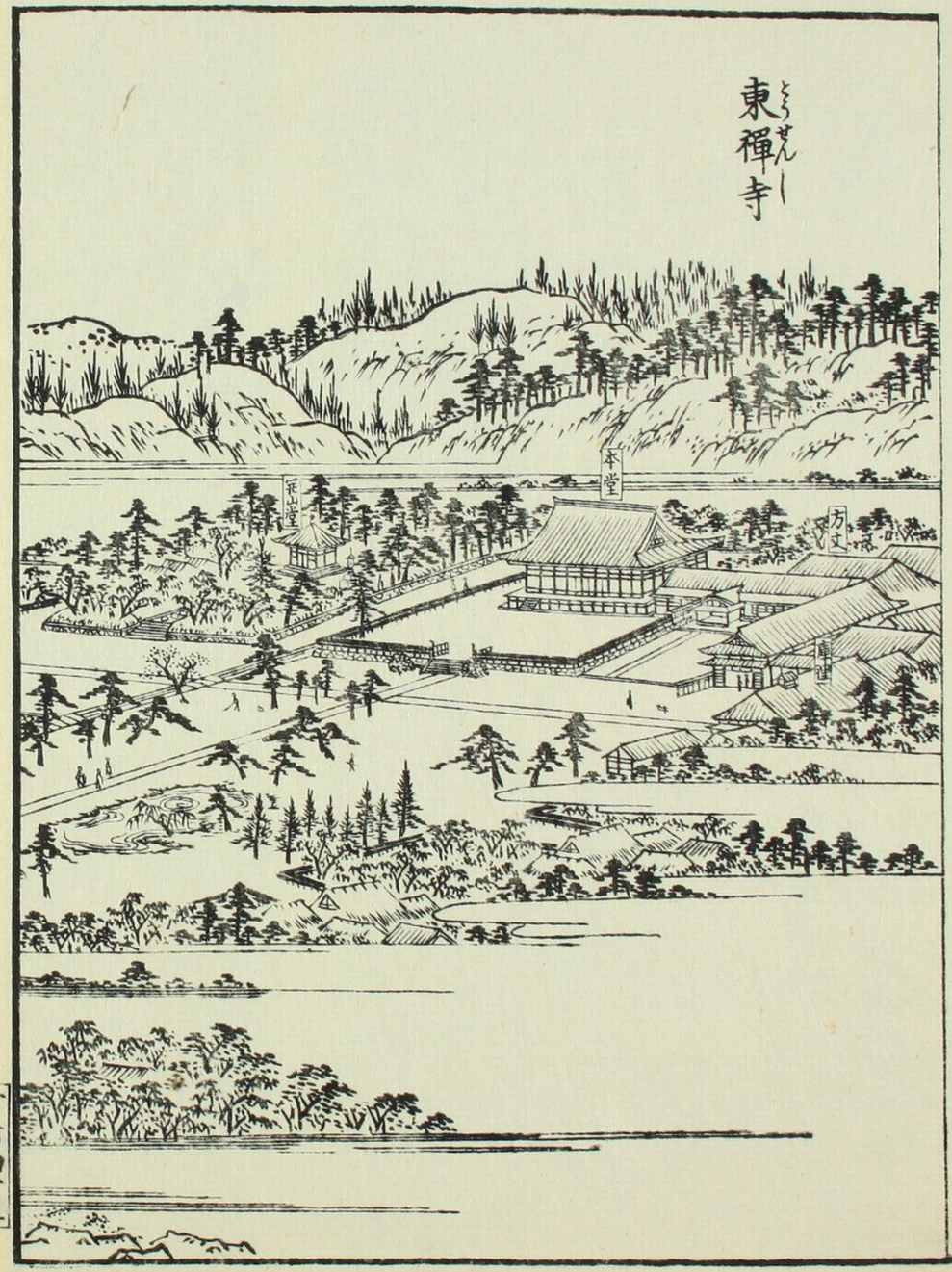
相伝ハ
石剣を
祭ると

鼓賽ハ
社地に何ぞ
限らず
樹木を
載ると
習俗と
せり



欽明天皇御崇敬あり又
醍醐天皇も尊信なしあり
震翰を注き縁起を作らせ給ふを将軍よりまふと
なり頼朝卿これを得給ひ鎌倉に安置し給ふ信浅
さるあり其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添
しとなり此霊像鎌倉兵乱の後当寺に迁し奉る
いなり
辯財天　慈覚大師江州竹生島より指てきたり頃海中
波間に影現あり宇賀神形を摸擬し御長七寸
三分に彫刻なりあひを当寺に安置しなるとなり
石神社　同所高輪南町鹿児島久留米両侯の間の小路
を入る西の方二丁半にあり祭神詳ならず同所天台宗
安泰寺の持なり昔八遮軍神に作り寄願ある者
成就の後ハ必何にに樹木を携へ来る社地に栽く

東禪寺



賽をとゝ此地を石神横町と字するハ此社ある所なるべし

土人誤まりて横町と唱ふ

佛日山東禪寺　同所高輪中町にあり　妙心派の禪宗江戸四箇寺の一なり　本尊ハ釋迦如来開山ハ嶺南和尚と号す

宝鑑國師和尚ハ日向國飫肥の人守永氏肥前守祐良の五男なり　幼より佛門に入り後宗門の大徳となる　寛永二十年癸未七月廿七日寂を慶長の頃江戸より来る阿左布に一宇を開く當寺是なり　其地を今も靈南坂と云　寛永年間今の地に移る　總門ハ海に臨む此門の額海上禪林の四大字ハ朝鮮國雪峯が筆なり頗る世に称せり

宝鑑録云　敕諡大夫法鑑禪師嶺南和尚大心中興主盟東禪開闢始祖得法洛西之地搖轉向上機關盛化海東之邊云云

有喜寿八幡宮　寺外右の方にあり　安泰寺奉祀す

此地を有喜寿の森と号く　或人云古へ老樹の枝一株ありて鵜の巣ありしゆへ鵜樹と

谷山　今云所ハ品川の入口にあり海に臨む丘をさしく昔ハ大日山と号くるとも紫の一木と唱へる草帝に昔此地に出崎ありしとも或ハ諸侯ハ人の邸宅ありしなり谷山ハ邑名なりしく月黑の南なり唱ふるとも河と

袖ヶ崎　仙臺侯別荘の地の辺へかけて都て谷山村なるも此地に限るの号あるなり　大日山と号くしハ昔此地に石像の大日如来立せるしゆへ谷山稲荷の地に後世其堂宇破壞せし頃寺へ収るとも今ハ其石像の所在を知らず

江戸名所圖會天極下終

宝子横山町
成内銀一郎